
探偵オペラ ミルキィホームズ ~ 帰ってきた名探偵 ~

Lowell

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

探偵オペラ ミルキィホームズ ー帰ってきた名探偵ー

【Nコード】

N9734Q

【作者名】

Lowell

【あらすじ】

怪盗Lとの戦いの後、イギリスに留学した小林オペラ。

あれから3年後…、小林は探偵となり、偵都ヨコハマへ戻ってきた。

これは、トイズを失ったミルキィホームズと探偵になった小林の物語。

この話は「探偵オペラミルキィホームズ」のゲームとアニメの後の話になります。

なので、ゲームをやっていない人やアニメを見ていない人にはわかりづらい箇所があると思います。

ここで僕と同じミルキィホームズの小説を書いている“コアラ”さんという方が、「探偵オペラミルキィホームズ」Game Release ver.」というゲームが元の小説を書いています。

僕のユーザーページのお気に入り小説やお気に入りユーザーから行けるので、

ミルキィホームズに興味がある人は一度読んでみてはどうでしょうか？

第1話 帰ってきた名探偵（前書き）

はじめまして、初投稿させていただきます。

ミルキィホームズの二次創作ですが、ゲームとアニメのあとの物語です。

ですのでミルキィホームズはトイズが使えません。

誤字脱字や文章におかしな部分があるかもしれませんが、楽しんで読んでくれたら幸いです！！

第1話 帰ってきた名探偵

小林「ここにくるのは3年ぶりかな…」

3年ぶりに降り立った偵都ヨコハマ。

小林「3年前、怪盗しが起こした事件の後は目立った事件は起きていなさそうだな」

3年前、怪盗しがヨコハマを消滅させようとした大事件をミルキイホームズのみんなど一緒に解決した。

あの事件をきっかけに、僕は探偵の在り方を強く実感した。

みんなに“名探偵”と言われても恥ずかしくないように、僕は1人イギリスへ留学した。

長いようで短かった3年間…、

そして僕は戻ってきた、

ここ、偵都ヨコハマに…!!

小林「それに…、これも返さないといけないな」

僕の手の中にある4つのブローチ。

それは、僕がイギリスに留学するときに、ミルキィホームズのみんなから預かったものだ。

小林「みんな元気かな…」

そう思っていたら、僕は真っ直ぐとある場所へ向かっていた。

小林「3年も居なかったのに、ここは全然変わってないな」

僕が訪れた場所…ホームズ探偵学院。

ここは僕がミルキィホームズのみんなと怪盗帝国と戦っていたときにいた場所だ。

みんなとの思い出が詰まった場所なんだ…。

小林「とりあえず、アンリエットさんには挨拶をしておこうかな」

途中で警備の人に止められたけど、「小林オペラです」と言ったら簡単に通してもらえた。

そして生徒会長室前…

コンコン…

アンリエット「はい」

「小林オペラ様がお見えになっております」

アンリエット「…！！わかりました、通してください」

ガチャ…

小林「失礼します」

アンリエット「あなたは…、本当にあの小林オペラさんですか？」

小林「はい。3年ぶりですね、アンリエットさん」

アンリエット「はい。小林さんもお変わりなく、元気そうで良かったです」

小林「あの…、怪盗Lのこと聞きましたか？」

アンリエット「ええ…、まさか怪盗Lがあの人だったなんて…。」

小林「僕がもっと早くあいつの存在に気づいていれば…」

アンリエット「小林さん、せっかく3年ぶりに帰ってきたのですか

ら、重い話は無しにしましょう。今日、小林さんはミルキイホームズに会いに来たのでしょうか？」

小林「…そうですね。このままじゃみんなに合わせる顔がありません」

僕がそう言ったあと、アンリエットさんは何やら少し考えだしてしまった。

何かあったのだろうか？

アンリエット「それでは私はミルキイホームズを呼びだしますので、小林さんは隣の部屋で待っていてください」

小林「どうしてですか？僕もこの部屋で待っていればいいんじゃない？」

アンリエット「ミルキイホームズへの、ちょっとしたサプライズですよ」

ふふっ、と微笑んでアンリエットさんは部屋から出ていった。

よくわからない点があるけれど、とりあえず隣の部屋で待っていよう。

シャロ「アンリエットさんから呼び出しなんて…、どうしたんでしよう?」

ネロ「少し成績が下がったから、お説教なんじゃない?」

エリー「怒られる…?」

コーデリア「そうね…。最近みんな成績が落ちて来てるし、ちゃんと勉強しないと…」

ネロ「生徒会長からお説教があるかもしれないのに、コーデリアも説教しないでよね」

コーデリア「あのね!! 私はみんなのためを思って」

シャロ「はいはい!! もうすぐ生徒会長室に着きますから、その辺にしてください!」

エリー「けんかは、駄目…」

コンコン…

シャロ「失礼します!!」

パタン…

みんなが生徒会長室に入ったと同時に、僕は隣の部屋を出た。
出来るなら今すぐこの扉を開けてみんなに会いたいけど、アンリエットさんが何か考えてるらしいので、とりあえず扉越しに話を聞いてみることにした。

盗み聞きするのはあんまり良くないけど…。

コーディネリア「あの…生徒会長。私達をここに呼んだ理由って…?」

アンリエット「…大体予想は付いていると思いますが、最近あなた達の成績がどんどん落ちていつています」

ネロ「うわ…、まさか本当にお説教だなんて…」

アンリエット「このままだと、どれだけ退学の期間を延長したとしても意味無いでしょう」

…!?

みんなが…退学だって!?

どうゆうことだ…?

エリー「そんな…!!」

シャロ「どうにかありませんか!？」

アンリエット「ええ、ですから私も考えました。あなた達は過去、怪盗しと怪盗帝国からヨコハマを守り、その他たくさんの事件を解決してきました。そんなあなた達を退学にしないためにも…、あなた達には専属の教師に付けてもらいます」

専属の教師？

……、

なるほど…、わかりましたよアンリエットさん。あなたがしようとしていることが!!

シャロ「専属の教師…ですか？」

アンリエット「はい。あなた達にはその教師から探偵としてのあるべき姿を学んでもらいます」

ネロ「教師、か…。そういえば今頃小林は何してるのかな…？」

エリー「小林さん、元気にしてるかな…？」

コーデリア「教官ならきつと立派な探偵になって、様々な事件を解決してるわよ」

ネロ「でも、“立派な探偵になったら帰ってくる”って言ったのに、まだ帰ってきてないよね？」

コーデリア「それは…」

ネロ「小林、僕達のこと…、忘れちゃったのかな…？」

エリー「……………」

コーデリア「……………」

シャロ「そんなことないですよ！！きつと先生は探偵の仕事が忙しくてこっちに來られないだけです！！」

ネロ「そうかな…？だってイギリスに行ってから手紙の一つもくれないんだよ？」

シャロ「それは…そうですね…」

ネロ「きつと小林はもう僕らのことなんて忘れてるよ…」

「「「……」」」

小林「誰がみんなのことを忘れたって？」

「「「「！！！！」」」」

僕はとつさに扉を開きみんなの前に現れた。

そしてみんなに向かつて…、

小林「今日から君たちの専属の教師になる小林オペラです。よろしくお願いします」

……………

シャロ「ねえネロ、ちょっと私のほっぺたつねってみてくれませんか？」

ネロ「うん、わかった。ついでに僕のほっぺもつねってよ」

シャロ「はい、せーのー!!」

ギュツ!!

シャロ「痛いー!!」

ネロ「痛っ!!」

コーデリア「ちょっと二人とも!!何してるの!？」

シャロ「痛い…、これは夢じゃない…、本当に先生が帰って来ました!!」

シャロ「ロックがそう言った途端に、みんなが僕のところへ駆け寄ってきた。」

小林「ごめんねみんな。待たせちゃったかな？」

ネロ「まったく…、もう少し早く帰ってきてよ、小林…」

シャロ「先生です!!本当に先生が帰ってきました!!ぐすっ…」

エリー「ぐすっ…、小林さん、会いたかった…」

コーデリア「イギリスへの留学、お疲れ様です、教官」

駆け寄ってきたとき、シャーロックとエルキュールは思いっきり泣いていて、ネロとコーデリアも目の端に涙を浮かべていた。

小林「会いたかったよ、みんな。…ただいま」

第1話 帰ってきた名探偵（後書き）

小林がミルキィホームズと再開するところまで書かせていただきました。

初投稿ですけど、難しいですね、二次創作って。

でも自分の好きなキャラクターでオリジナルの作品がつくれるので、楽しいです。

皆さんにも楽しんで読めるような作品を書いていきたいので、応援よろしくお願いします！！

第2話 ミルキイホームズ再び！？（前書き）

こんにちは、Lowellです。

探偵オペラミルキイホームズへ帰ってきた名探偵へ第2話投稿です。

誤字脱字やおかしな部分があったら指摘してください。

それではどうぞー！

第2話 ミルキイホームズ再び！？

ミルキイホームズのみんなと再開した僕は、アンリエットさんの計らいで少しみんなと話をさせてもらった。

小林「それにしても、3年も経ったのにみんなあまり変わらないね」
みんなは3年前とあまり変わらない姿だった。

コーデリア「はい、教官もお変わりなく」

シャロ「先生！！せっかいですから先生が学んだこと、教えてください」

ネロ「そうだね。いろいろ教えてよ、小林」

小林「そうだな…、イギリスに行ったあと一年間は探偵としての心得を学んだかな」

僕はイギリスへ行ったときの話をみんなにしてあげた。

小林「僕はトイズを失ってからずっと、探偵であることから逃げてきた…。だけど、みんなと一緒に怪盗帝国や怪盗しと戦い、“本当の探偵になりたい”って思えるようになったんだ」

エリー「あの…、小林さんのトイズは戻ったんですか？」

小林「いや…、戻ってないよ」

シャロ「え！？先生もまだトイズが戻っていないんですか？」

小林「そうだね…」

三年間イギリスに渡り勉強したけど、結局僕のトイズは元に戻らなかった。

小林「でもね…、トイズが無いからって探偵になれないわけじゃない、って僕は思うんだ」

コーデリア「トイズが無くても…、ですか？」

小林「うん。確かにトイズは便利な力だ。あれば調査のときにも役に立つ。でも、僕が探偵に必要なと思うもの…、それは探偵になることを諦めない思いだと思うんだ」

エリー「思い…、ですか？」

小林「そう。どんなに辛いことがあっても、どんなに苦しいことがあっても、“探偵になりたい”という強い思いがあれば、必ず探偵になれるって、僕は信じてる」

アンリエット「…なるほど、やはり小林オペラさんの言葉は説得力がありますね」

小林「いや、そんなことないですよ」

アンリエット「ところで…一つ伺いたいことがあります。私はあなたに彼女らの教育係の話は一言も口に出していません。けど、あな

たは自分が教育係だと堂々と言っていた…、それは何故ですか？」

小林「理由は二つ。一つは彼女達の成績がどんどん落ちて、退学の危機に迫られている。だけどアンリエットさんは退学の期間を延長している。退学の期間を延長しているなら専属の教師をつけることも可能だったはずだ。なのにアンリエットさんはそれをしなかった…」

アンリエット「……………」

小林「そもうひとつは、僕がこの学校に来たと同時に彼女達にこの話を話したこと…。この二つの理由から導きだされる答えは、僕に彼女達の専属の教師をやって欲しい、ということです。違いますか？」

アンリエット「…さすが、本物の名探偵ですね」

シャロ「…す、凄いです、小林さん！！」

ネロ「さすが世界の名探偵、小林だね」

彼女達に褒められて、少し恥ずかしくなって僕は少し顔をそらした。

コーデリア「でも…、その話を聞いていたということは…、教官もしかして盗み聞きしてたんですか！？」

小林「うつ…!!」

エリー「盗み聞きは、いけないことだと思います…」

小林「そ、そうだね…。ちゃんと反省してるよ」

アンリエット「…まあ、そのことに関しては今回は無しにします」

小林「はい…。そういえば、君たちの成績が落ちてる、と聞いたけど…、何かあったのかい？」

シャロ「…それは…」

小林「…？」

コーデリア「私達も、トイズを失ってしまったんです…」小林「何だって…!!シャーロックのサイコネシスも、ネロのダイレクトハックも、エルキュールのトライアセンドも、コーデリアのハイパーセンシティブも、全て使えないってこと？」

シャロ「…はい」

そんな…。

彼女達も僕のようにトイズを失ったっていつのか…？

アンリエット「彼女達はトイズを失い、トイズを使える頃と比べ格

段に成績が落ちています。このままだと退学は時間の問題でしょう……」

小林「…それで、僕が教育係として採用されたわけですか」

アンリエット「ええ。あなたもトイズを失いましたが、見事探偵になりました。その知識を彼女達に教えて欲しいのです」

小林「……………」

僕は今、とても不安になっていた。

僕はトイズ無しで探偵になった、それは事実だ。

しかし、それは三年間という長い歳月があったからで、短期間で彼女達を探偵に育てることはできるのか…？

シャロ「先生！！」

小林「…なんだい？」

シャロ「私達はたとえトイズが無くたって探偵になりたいんです！！だからお願いします、先生！！」

ネロ「そうだよ。あと、自分から教師になるって言ったんだから、言った責任はとってよね、小林！！」

エリー「私は、まだみんなと一緒に居たい……！！まだみんなと探偵で居たい……、だからお願いします、小林さん……！！」

コーデリア「お願いします……！！私達、ミルキイホームズをまた昔のような探偵に育ててください、教官……！！」

小林「……………」

そうだな……。

僕はなにを迷っていたんだろうな。

彼女達は探偵になりたいという強い思いがある。

なら僕がやれることは、イギリスで三年間学んだことを彼女達を教えることだ。

うまくいかなかったら彼女達は退学になってしまうのかもしれない。

けど、それを恐れていては彼女達と前に進めない。

僕はみんなと一緒に探偵として生きていきたいんだ……！！

小林「……僕が教えられることなんて少ししか無いけど……、それでもいいのかい？」

シャロ「はい……！！もちろんです……！！」

シャーロック以外も同じような反応をしていた。

小林「…僕なんかでよければ」

シャロ「よろしく願います!!先生!!」

ネロ「まあこれからもよろしく、小林!!」

エリー「よろしく願います…、小林さん…」

コーデリア「これからよろしく願います、教官」

小林「ああ、こちらこそよろしく、みんな!!」

こうして、

僕は再びミルキィホームズの教育係になった。

この先何があるかわからないけど、

それでも、乗り越えていける…、

彼女達と一緒になら…。

第2話 ミルキイホームズ再び！？（後書き）

楽しんでいただけましたか？

この小説の更新は基本的に作者の気分次第になります。

なので、更新が遅くなったり早かったりしますが、その部分も生暖かい目で見守ってください。

それではまた次回！！

第3話 シャーロックの勉強会（前書き）

こんにちは、Lowellです。

久しぶりの投稿になります。

楽しんで読んでいたださい！！

第3話 シャーロックの勉強会

僕がみんなの教育係として決まった翌日…

小林「さて…改めて今日からまたよろしくね、みんな」

僕はもう一度みんなに挨拶をした。

ネロ「それで、教育係になって具体的に何をしようとしてるの？」

小林「そうだね…、とりあえずみんなの今の学力が知りたいから、テストをやるうと思う」

シャロ「ええ！？抜き打ちテストですか！？」

エリー「大丈夫、かな…」

小林「そんなに心配しないで。昨日のうちに作った簡単なテストだから」

コーデリア「教官、ちゃんと私達のレベルに合わせてありますか？もしかして自分と同じレベルの問題じゃ…ありませんよね？」

小林「大丈夫。ちゃんとみんなのレベルに合わせてあるから」

コーデリア「そうですか。それなら良かったです」

小林「このあと30分間テストを行うから、みんなしっかり頑張
てね」

ミルキィ「……はい」「」

30分後…

小林「はい、それじゃあテスト終わり。僕のところに持ってきてね」

みんなの答案を回収して答え合わせをしていく。

小林「うーん…、みんな思った以上に学力は悪いわけじゃないんだ
ね」

ネロとエルキュールは平均ぐらいで、コーデリアはトップレベルの
学力で驚いた。

ただ…

小林「…シャーロックはもう少し頑張らないといけないかな…」

シャロ「ええ!？」

シャーロックの結果はちよつと…いや、かなり悪かった。確かにこのままじゃいけないかな…

小林「シャーロックには一通り授業を復習していく必要がありますね」

シャロ「え…。それって先生と二人っきりの授業ってことですか？」

小林「まあ、そうゆうことになるかな」

何故かシャーロックは“二人つきり”の部分を強調した気がしたけど…気のせいかな？

ネロ「いいなーシャロ。小林と二人つきりで勉強なんて」

エリー「…羨ましい」

コーデリア「シャロ!! 抜け駆けは許さないわよ!!」

シャロ「い、いえ!! そうゆうつもりじゃないですよ!!? ただ先生は私の成績が心配だから授業をしてくれるってだけで…」

小林「えつと…。みんなも成績が心配なら勉強を教えよつか？」

シャロ「み、みんな成績のことなら心配ないですよ!! それより先

生、早く勉強を教えてください!!」

小林「う、うん。わかったから引つ張らないで、シャーロック!!」

そのままシャーロックに引つ張られて事務所を後にした。

少し顔が赤くなっていたけど…どうしたんだろう？

ネロ「やっぱりあの鈍感さは小林だね」

コーディリア「そうね…。そこところは少しでも良いから治って
てほしかったけど…」

エリー「これから、どうする…?」

ネロ「そんなの、この状況からやることは一つだけでしょ?」

エリー「え…、何するの…?」

コーディリア「やっぱりネロもそれを考えていたのね…。…わかった
わ、それじゃあ行動開始よ!!」

エリー「…?」

僕はシャーロックに引つ張られて近くの教室までやってきた。

今は授業が終わったあとなので人はいない。

小林「シ、シャーロック…、そんなに急がなくてもいいんじゃないかな…？」

シャーロック「す、すいません！！みんなに茶化されたのでつい…」

小林「茶化されたって…？まあいいか。それじゃあシャーロック、これから数日間渡って勉強を教えていくけど、いいかい？」

シャーロ「はい！！よろしくお願いします、先生！！」

翌日…

シャロ「はう…、もうダメ…」

小林「おいおい…、まだ始まって一時間しか経ってないよ？もう少し頑張れるかい？」

シャロ「無理です…。難しすぎます………」

小林「仕方ない…少し休憩にしよう。そのあとはもう少し頑張つてね、シャーロック」

シャロ「はい………」

…少しレベルが高かったかな？

次はもう少しレベル下げて教えないと…。

15分後…

小林「さて…、もうそろそろ休憩も終わりにして勉強を始めよう…」

…ってシャーロック？」

シャロ「ZZZ…」

小林「寝ちゃってる……、シャーロック、起きて」

少し揺らしてみただけ起きる気配は無かった。

さて…、どうしようかな…。

シャロ「…先生」

起きたかな…、て思ったら…寝言だったか。

シャロ「ずっと…一緒に…」

…僕の夢でも見ているのかな？

シャロ「ネロも、エリーさんも、コーデリアさんも、ずっと一緒にすよ〜…」

…全く、どんな夢を見てるんだ、君は…。

シャーロックはとても気持ち良さそうに寝ているし、もう少し寝かせておいてあげよう。

シャロ「すう…」

小林「（寝顔…可愛いな…）」

おつといけない。彼女は大切な教え子なんだ。やましい気持ちを抱
いちゃいけない。

シャロ「…先生…、大好きですよ…」

…!!

全く…寝言で何を言ってるんだ…。

小林「よつと…」

僕は寝ているシャーロックに毛布を被せて、起きるのを待っていた
…。

ネロ「あゝ、小林がいるのに寝ちゃったよ…シャロ」

コーデリア「危ない、シャロ…!!そんなところで寝たら教官に襲
われちゃう…!!」

ネロ「このあとの小林の行動が気になるな。僕は」

エリー「ねえ…盗み見は良くないと思うよ…?」

ネロ「盗み見じゃないよ、エリー。小林がシャロに襲いかからないか見張ってるんだよ」

エリー「結局同じことなんじゃ…」

コーデリア「早く起きて…シャロ! このままだと…教官が狼になっちゃう!」

ネロ「まあ小林に限ってそれは無いと思うけど。それよりどうする、エリー? このままだとコーデリアがお花畑に飛んでっちゃうよ?」

エリー「もう…遅いと思う…」

コーデリア「駄目、教官…!! 私達がいるのに…!!」

ネロ「…これじゃ、シャロが起きるまでずっとこの状態だろうね」

エリー「早く起きて…シャロ…!!」

シャロ「…あれ、私寝ちゃったんですか…？」

小林「おはよう、シャーロック。といつてももう午後8時だけだね」

シャロ「…ごめんなさい、先生」

小林「どうしたんだい？突然」

シャロ「私、成績が悪いから先生がせっかく用意してくれた勉強時間を私、寝ちゃって…！！」

突然シャーロックは泣き出してしまった。

シャロ「すみません…先生…！！」

小林「…泣かないで、シャーロック」

シャロ「え…？」

小林「眠かったなら仕方ないよ。今日出来なかった分はまた明日やればいい。まだ時間はあるんだから」

シャロ「…ありがとうございます…先生!」

小林「じゃあもう遅いし…、宿舎に帰ろうか」

シャロ「はい!」

その後僕はシャーロックを宿舎まで送っていった。

コーデリア「…あれ、教官とシャロは？」

エリー「もう帰ったよ…」

コーデリア「ええ!?!じゃあ何で私達ここにいるの!?!」

ネロ「あんな状態のコーデリア、残していけるわけないでしょ…」

コーデリア「ご、ごめんなさい!私、また…」

ネロ「はあ…次からはちゃんとしてよね？」

エリー「私達も、戻ろう…？」

それから数日…

小林「このところは大体出来るようになったかな？」

シャロ「はい、バッチリです…！」

シャーロックの学力は少しずつだけど確実に上がっていた。

この調子なら人並みぐらいには出来るようになるだろう。

シャロ「…くしゅん…！」

小林「大丈夫？」

シャロ「はい…。少し寒いので窓を閉めてきます」

シャーロックは窓を閉めにいった…、って遠くから何かが飛んでくる…？

あれは…野球ボール!?

このままだとシャーロックに当たってしまう!!

小林「危ない、シャーロック!!」

シャーロ「きゃあ!?!」

僕はとつさにシャーロックを突き飛ばしたけど…

ゴス!!

ボールはそのまま僕の頭へ直撃した。

シャーロ「先生!!!大丈夫ですか…先生…」

僕はそのまま闇の中へ落ちていった…。

小林「…う、うーん…。あれ、ここは…」

シャロ「気が付きましたか？先生」

小林「ああ、そういえばボールが頭に当たって…気を失ったのか？」

シャロ「はい。もう大丈夫ですか？」

小林「うん、もう大丈夫だよ」

シャロ「そうですか、良かった…。先生、助けてくれてありがとうございます」

小林「いや、気にしないで。それに、とつさに突き飛ばしちゃったけど…、シャーロックこそ怪我は無かった？」

シャロ「はい、大丈夫です」

小林「そうか、それなら良かった…」

改めて今の状況を確認すると、僕の頭は今シャーロックの膝の上にある。

いわゆる“膝枕”状態だ。

シャロ「そういえば、こうゆうこと昔もありましたよね」

小林「そうだね…。あれは二人で遊園地に行ったときだったっけ？」

シャロ「あのとき私は先生のことを考えずに絶叫マシーンばつかに乗っちゃって…、先生倒れちゃったんですね」

小林「ああ、そのときも今みたいに膝枕してもらったっけ」

シャロ「はい。少しは気分は楽になりましたか？」

小林「うん、だいぶ楽になったよ。ありがとうシャーロック」

シャロ「それと…、私の膝枕、昔と比べてどうですか？」

小林「…あんまり変わって無いかな」

シャロ「そんなこと無いですよ、先生。私だってもう18歳なんですから少しぐらいは変わってると思いますよ？」

小林「そうかな…？でも、シャーロックの膝枕はとても心地よくて僕は好きだよ」

シャロ「そうですか？そう言ってもらえると私も嬉しいです。それと…私も…先生のこと…」

ゴンゴン…！

ネロ「小林」

急に窓からネロが入ってきた。

鍵は閉めたはずなのに…。

シャロ「きゃあ！！ネ、ネロ！？それにエリーさんも、どうしてここに！？」

ネロ「話は後！！とりあえず、コーデリアをどうにかしよう！！」

小林「コーデリアに何かあったのかい？」

エリー「えっと、それが…」

コーデリア「教官…、シャロ…、うふふふ…」

小林「…えっと」

ネロ「小林は知らないと思うけど、コーディネリアは時々自分の妄想世界に入っちゃうんだ…」

小林「そ、そうなんだ…」

シャロ「そういえば、コーディネリアさんが私と先生の名前を読んでましたけど…、もしかして覗いてたんですか!？」

ネロ「……………」

エリー「……………」

シャロ「ちょっと二人とも何で黙ってるんですか!？」

小林「ケンカはあと!!今はコーディネリアを何とかしよう!!」

その後コーディネリアをもとに戻すのに30分かかり…、覗いていた三人への罰としてシャーロックの会心のチョップがお見舞いされた…。

第3話 シャーロックの勉強会（後書き）

今回はシャロとの恋愛エピソードを書いてみました。

こうゆうものは書いたことがないので少しおかしいところがあるかもしれませんが…。

あと、小林はミルキイホームズのみんな一人一人と一回ずつ遊園地に行った…とゆう設定になっています。

今回はシャロを書いたから次は誰にしようかな…て思ってるLow e11でした。

次回もお楽しみに！！

第4話 お菓子な探偵（前書き）

シャロ回に続きネロ回です。

友達からのアドバイスでセリフの前にキャラの名前をつけないほうがいいと言われたので、今回はセリフの前にキャラの名前が入っていません。

それではどうぞー！！

第4話 お菓子な探偵

学校やシャーロックの授業が無い休日。

僕は久しぶりに部屋でくつろいでいた。

コンコン…

「小林」

今のは…ネロの声かな？

「どうしたんだい？」

「ちょっと小林に頼みたいことがあるんだけど」

「頼みたいこと？…まあとりあえず中に入れておいで」

「それじゃお邪魔します」

そう言つてネロは僕の部屋に入ってきた。

ちなみに今日は休日なのでネロは私服姿だった。

「へえー。小林の部屋って結構片付いてるんだね」

「いつ誰が来てもいいようにね。常に部屋は片付けているよ」

僕がそう言ったあと、ネロは急に部屋を物色（特にベッドの下）し始めた。

「えっと…、何しているんだい？」

「何って…見ての通り部屋の物色。小林だって男なんだからああゆう物の一つや二つ持つてるでしょ？」

…ああゆう物って何だ？

「ねえネロ、ああゆう物って…」「あー！こんな所にお菓子はつけん！！」人の物を勝手に食べないでね、ネロ」

「何？何か言った小林？」

そう言いながら僕のお菓子を食べるネロ…。最後の一個だったのに…。

「…もういいよ。あと、君が探してるものは多分ここには無いんじゃないかな？」

「いや、小林だってもう22歳なんだし、そうゆうことに興味があっても不思議じゃないと思うけどね」

「…？ちなみにネロは何を探しているんだい？」

「そんなの、Hな本に決まってるでしょ？」

「何て物を探してるんだ君は！！」

必死に僕は否定する。

いや、本当に持ってないからね！？

「小林く持ってるんでしょ？教えてよ」

「確かに興味が無いわけじゃないけど…今は君たちのこともあるし…」

「何？もしかして小林、僕たちをそうゆう対象に見てるの？」

「ち、違う！！そうゆうわけじゃない！！」

僕は力強く否定した。

大切な生徒たちをそうゆう対象になんて…絶対に駄目だ！！

「…そんなにおもいつきり否定するなよ。悔しいじゃん」

「え…、何か言ったかい？」

「…小林の鈍感…」

「え…？」

「何でもないよ！…それより頼みたいことがあるんだけど」

そう言ったネロは少しふてくされていた。

…何か悪いことでも言ったかな？

「…それで、頼みたいことってなに？」

「お菓子買いにデパートに行くから、小林も一緒に来てほしいんだけど」

「別に行くのは構わないよ。僕も少しお菓子が欲しいからね」

「そういえばさっき引き出しの中にお菓子が入ってたけど、小林もお菓子を食べるんだね」

「もちろん。疲れたときの頭には糖分を摂取したほうがいい、昔ネ口にそう言われたからね」

「覚えててくれたの？嬉しいな〜!!」

「まあね。だから勉強が終わったあとはなるべくお菓子を食べるようにしてるかな」

「そういえばさっきのでお菓子無くなったね」

「うん。だから僕も少しお菓子を買いにね。…あとネロ、人の物を勝手に食べるのは良くないよ。食べる前にきちんと持ち主に確認を取ってくれ」

「はいはいわかったよ。…まったく小林はケチくさいな〜」

「あと、僕を呼んだってことは、そんなにたくさん買うつもりなのかい？」

「まあね。それ以外にも目的はあるけどね…」

「目的？」

「小林は知らなくていいよ。…どうせわかんないだろうし」

「……………」

何だろう、いったい…？

「遅いよ、小林！！」

「そんなに…いきなり走らないでよ…」

あのと、僕はネロと一緒に近くのデパートに来ていた。

「さて…何を買おうかな…」

「小林っていつもは何を買ってるの？」

「そうだな…、最近はチョコレートが多いかな。手軽に食べれて美味しいからね」

「へえ、そうなんだ。ちなみにチョコレートならあそこにあるき○この山とた○のこの里がオススメだよ」

「そうだね…。じゃあ今日はこれにしようかな」

「あ、ボクの分も取って！！両方二箱ずつね」

僕は棚から僕の分とネロの分を取った。

二箱って…、どれだけ買うつもりなんだ、ネロは？

「ネロ…、ちなみにあとのくらい買うつもりなんだい？」

「そりゃもつと買つよ？一袋で収まるならわざわざ誰かを呼ばないでしょ」

「そうだね…」

それほど買つというと色々心配になってくる。

金銭面のこととか、他にも色々と…。

「どうしたの、小林？言いたいことがあるならはつきりと言っちゃっていいよ」

「…ネロは、そんなにお菓子を食べて体は大丈夫なのか？太ったりは…」

「…小林、女の子にその話題はNGだと思うよ」

「デリカシー無いのは知ってるけど…ネロが心配だから…」

「…ありがとう、小林。まあ僕はあんまり気にしないけどね。なんか食べても太らないし」

「へえ…ネロはそうゆう体質なのかもしれないね」

「そう。だからダイエットとかしなくていいから楽チンだよ」

「羨ましいな、僕はそうじゃないからあまり食べられないよ」

「じゃあ少し運動すればいいんだよ」

「いや、最近運動とかやってる時間は無いんだよね」

「そうだね…最近僕たちの勉強で小林の時間が削れていくからね…」

「いや、そうゆうことじゃないよ。確かに最近仕事で自由な時間は無くなってきてるけど、そのことが迷惑だなんて一度も思ったことはないよ」

「…本当に？」

「ああ。むしろ僕はネロたちの教師が出来ることを誇りに思ってるし、これからも続けていくつもりだよ」

「…ありがとう、小林」

その後、僕はネロと一緒にたくさんのお菓子を買って帰った。

「…疲れた」

「小林、これくらいで疲れないですよ」

まさから袋も買うとは…予想外だった。

「これでもまだ少ないほうだよ？」

「これで!？」

「そうだよ。この前なんてみんなで買いに行っても持ちきれないくらい多かったんだから」

ネロ…。君はお菓子にいくらお金を使ってるんだ…？

「えっと…月に大体1〜2万ぐらいかな？」

「えっ…!？何で僕の考えてることがわかったの？」

「そりゃ…僕のトイズで小林の心を読み取ったんだよ。」

ネロのトイズで？

そんなことができるのか？

でもネロってトイズ使えないはずなんじゃ…

「…まさか、小林があんなこと考えてたなんて…」

「え、何？！僕何やってるの！？」

「そりゃあ、僕やシャロたちとあーんなことやこーんなことを…」

「考えてないからね、そんなこと！！！」

まったくネロは何を言ってるんだ！！

「…というのは冗談で、ただ小林がそうゆうことを言いたそうな顔してたからね。それに今僕はトイズが使えないし、第一僕のトイズはそんなトイズじゃないよ？」

「そうだね。…そういえばネロは自分のトイズが失って不安じゃな

いの？」

このことはネロだけじゃなくってみんなにも言いたかったことだ。

みんなトイズを失って、退学になるかもしれないのに、笑って生活してる。

僕がトイズを失ったとき、不安で仕方なかった。
探偵を止めようと思ったくらいに…。

でも、彼女たちは違う。

みんなトイズを失っても、笑っているし探偵になることも諦めていない。

どうして…？

「…正直言ったら、不安だよ。もうすぐ退学かもしれないのに不安じゃないわけじゃないじゃん。でも…」

「でも…？」

「小林前に言ったよね？ “トイズが無くても探偵になれる” って。それ聞いて僕たちも探偵になれるって思ったんだ。だから確かに不安だけど、探偵になることを諦めたりしない。みんなと一緒に探偵を続けるために…ね」

…やっぱり不安だったんだ…。

「ただ僕の言葉を聞いてみんなはまた“探偵になりたい”という気持ちをもってくれた。」

「何だか…嬉しいな」

「あ、あとみんなっていうのはちゃんと小林も入ってるから。仲間はずれにはしないからね」

「…ありがとう、ネロ。僕は必ずみんなにここを卒業させる。退学になんか、絶対にさせない…!!」

「…わかった。ボクたち、ちゃんと頑張るからよろしくね、小林」

翌日…

「…痛っ!!」

「大丈夫ですか…？小林さん…」

「ああ、大丈夫だよ。少し筋肉痛になっただけだから」

「…もしかして小林、あんでだけで筋肉痛になったの？」

「…まあ、ね。…これは少しは運動しないといけないかな…痛っ」

「教官、少しストレッチしましょうか？」

「じゃあ…お願いしようかな」

僕は近くのソファにうつ伏せになった。

「…何をしたら、こんなに筋肉痛になったんですか？」

「そんなに激しい運動はしてないよ。ちょっとネロとお菓子を買いに行っただけだよ」

「ネロと、って…先生何袋ぐらいもたされたんですか？」

「えっと…、3袋くらいかな？」

「あれ？でも先生、私たちよくネロの買い物に付き合ってますけど、それぐらいはいつも持ってますよ？」

「え、そうなの！？」

「そうだよ。特にエリーなんかトイズが使えた頃は一人で10袋も持ってたんだから」

「10袋を一人で！？それは凄いな…」

「そんなことないです…。ネロ、このことは小林さんには言わない約束…」

「そうだったね。ごめん、エリー」

コーデリアのストレッチを受けながら僕はみんなと話をする。

ああ…、気持ちいい…。

「ネロ、そんなに買っただったら教官だけじゃなくて私たちも呼んでくればよかったのに…」

「そうだね…。まさかこんなに小林が筋肉痛になるなんて…」

なんだろう…、凄い申し訳ない…。

「昨日授業が終わったあとすぐにネロはいなくなっていましたよね？」

「うん。小林の部屋に迎えに行ったよ」

「…どうだった？」

「うーん…、あんまり面白いものは無かったね。綺麗に片付いてたし」

「へえ…、さすが教官です」

確かに部屋は綺麗にしてたけど…

そんなに凄いことなのかな？

「凄い綺麗にしてたし…探したら成人向け雑誌がいっぱい出てくるかもしれないよ？」

「ちょっとネロ！？何言ってるの！？」

昨日来たとき無いって言ったよね！？

「小林さん…そんな物持ってるの…？」

「いや、持っていないから！！だからエルキュール、そんなに顔を赤くしないで！！」

「そんないかがわしいものを持つてるなんて…、教官の…変態…！！」

「だから持っていないって…、ちょっと待ってコーデリア！！関節は

そつちには曲がらな…」

この後の惨状を、僕は二度と思い出したくない…。

「本当に申し訳ありませんでした、教官!!」

「いや…まあ誤解が解けて良かったよ」

さっきの騒動が終わり、僕たちは昨日来たデパートへもう一度来ていた。

「いやゝごめんごめん。昨日買い忘れた物があったさ」

「それはいいけど…、今日はみんなも来たんだ?」

「もしかしたらネロ、また先生にたくさん荷物を持たせちゃうかも
しれませんから!!」

「迷惑…でしたか?」

「そんなことはない。僕はみんなと来れて嬉しいよ」

「ボク個人的には小林と二人で来たかったけど…」

「何か言った？ネロ」

「いや、なぐんにも」

「…？じゃあとりあえずお菓子売り場に行こうか」

このデパートは5階建てで、お菓子売り場は4階にある。

だからお菓子を買うだけでもエレベーターを乗り降りしないといけないので非常に大変だ。

「あんまり買う物は多くないし、ボクと小林だけで行ってくるよ」

「え…私たちも一緒に行きた」そういえばシャロ、今日は特売日にかまぼこが安く売ってるらしいよ？」本当ですか！？早速買ってきます！！」

そう言ったシャロは一目散に食品売り場へ走って行った…

「いいの、二人とも？このままだとシャロどっか行っちゃうよ？」

「早く…、追わないと…」

「…わかったわ。教官、ネロのこと頼みます。ネロ、もし人手が足りなくなったらPDAに連絡してね」

そう言ったコーデリアはエルキュールと一緒にシャーロックを追いかけていった。

「さて…それじゃ行こうか、小林」

「う、うん…」

なんだかみんなうまくネロに丸め込まれた気がするけど…気のせいだろう。

「まったく…いちいち面倒だなあ…このデパート」

「そうだね…。お菓子なんだからもう少し下の階でもいいのに…」

「ぶつぶつ言ってもしょうがないよ。さっさと買って戻らないとコ

「デリアの説教を喰らっちゃうよ」

「そうだね。…あ、エレベーターがきたよ」

僕とネロはエレベーターに乗り、4階に向かって進む。

「今日は休日なのに人が少ないね」

エレベーターに乗っていたのは僕とネロの二人だけだった。

「そうだね。でもボクは小林と二人つきりになれたし、良かったよ」

「二人つきりって…」

「あれ…？…ねえ小林、このエレベーターだんだんスピードが落ちてない？」

3階を通り4階へ向かう途中、エレベーターは少しずつ速度を落としていた…。

「…本当だ。でもまだ4階には着かない。このままだと…」

そしてエレベーターはお菓子売り場へ着く途中で…停止した。

「…止まっちゃったよ」

「大丈夫。こうゆうものはどこかに非常用の電源があるはず…」

僕は非常用の電源を探してみたけど…無かった。

「…あれ？じゃあ緊急用の電話は…」

あるにはあったが…掛けても繋がらない…。

「ネロ、PDAは使えるかい？」

「ちょっと待ってて…ダメだ、繋がらないよ…」

「そうか…」

打つ手無しか…

「…救助を待つしかないのかな」

「いや…まだ手はあるよ」

「え…？」

「トイズだよ。ボクのトイズならエレベーターの電源にハッキングして自由に動かせることができる」

そうか…。

ネロのトイズはダイレクトハック。電子機器を自由に操れる。

「でも…、今は君はトイズを使えないんじゃない？」

「そんなのやってみなくちゃわかんないだろ!？」

そう言ったネロは取り出した鉄の棒でトイズを使用する動作に入
った。

「動け…動けよ!!」

「もう止めるんだ、ネロ!!」

「うるさい!!今集中してるんだ!!少し黙っててよ!!」

「ネロ!!こんな無理矢理使ってもトイズは戻ってこない。ネロだ
ってわかってるんだろ?」

「そんなこと、とつくの昔にわかってるさ…けどボクは、早く小林
と一緒にみんなのところに帰りたいんだよ!!」

「…それは僕だって同じさ。でも今僕たちにできることは何も無い。
救助を待とう」

「でも…」

「大丈夫。僕と一緒にいるから心配しないで」

「うん…わかった…」

「救助…遅いね…」

「もしかしたら復旧が遅れてるのかもしれない…」

「昔…遊園地で観覧車に乗ってるときも、こんな状態じゃなかった？」

「…確かにそうだね」

3年前…ネロと一緒に遊園地に行ったとき、今と同じように観覧車に閉じ込められた。

あのときはエルキュールのトイズで助かったけど…

「それに…また二人つきりになれたよ？」

「…そう、だね」

改めて言われるとなんだか恥ずかしい。

「…最近ネロはこうゆう“二人っきり”とかよく言うけど…面白半分で言ってるでしょ？」

「へえ…小林はボクがこうゆうことを冗談で言ってるように見えるんだ？」

「ま、まあね…」

でも僕だって男だし…、こうゆう状況だったらそりや意識はするぞ。

「じゃあ…冗談かどうか…試してみる？」

「え？」

ネロはどんどん僕に顔を近付けてくる…

「…この状況も昔あったよ。今回も冗談でやってるんだろ？」

「昔は面白半分でやってた…。でも…今は…本気だよ?」

「え…?」

僕とネロの顔の距離が少しずつ近付いてゆく…。

「ボク…前から小林のこと……」

ガタン!!

「「!?!」」

急に動き始めたエレベーター。

…そういえばもうすぐ次の階に着くんじゃなかったっけ？

「すぐに離れて…！ネロ」

「う、うん…うわっ…！」

急に動き始めたので僕もネロも慌てていたらしく、僕はネロを押し倒すように倒れてしまった。

「もう…小林は大胆だな…」

「今はそんなこと言ってる場合じゃ…！！」

こんなことしてる間にエレベーターは次の階に着き、扉はゆっくりと開き始めた…。

（いや！！今の状態で開くのはマズイ！！お願い、もう少し待って！！）

僕の願いも虚しく、無情にも扉は完全に開ききった。

「先生…！！」

「ネロ…!!」

「教官!!ネロ!!大丈夫です…か?」

彼女たちの目の前あったのは…僕がネロを押し倒している状況…。

僕とネロは事情を知ってるけど、何も知らないみんなが考えることなんて誰でも想像がつく。

「いや、みんな待ってくれ!!これには事情が…」

「教官の…ケ〜ダ〜モ〜ノ〜!!」

「落ち着いてコーディネリア!!これには事情が…、待って!!腕はそれ以上曲がらな…」

コーディネリアが事情を理解するまで、僕は三途の川を渡りかけた…

第4話 お菓子な探偵（後書き）

楽しんでいただけましたか？

個人的にはネロを積極的にし過ぎたと思って反省してます。

あと、セリフの前にキャラの名前を付けるか付けないか、どなたかアドバイスしてくれると助かります！！

ネロ回が終わったので次はエリー回かな…

それでは次回もお楽しみに！！

第5話 本好きエルキュール（前書き）

「今回の前書きには、私、シャーロック・シェリンフォードと…」

「譲崎ネロが、ゲストとして参加するよ」

わー（パチパチパチ）

「でもどうしていきなり前書きに参加させたんでしょう？」

「作者の気分だよ、きつと」

その通り。もしあらかじめ決めていたならシャロの回くらいから参加させてるよ。

「適當ですね…」

「いいんじゃない？それで、今回は誰の回なの？」

今回はエリーの回です！！

「エリーはしゃべるのが得意じゃないから大変だったんじゃない？」

まあね。でも自分なりに頑張りました。

「お疲れ様でした」

それではどうぞー！！

第5話 本好きエルキュール

「ふう…」

ある日のお昼頃

仕事も一段落つき、僕は休憩を取ろうとしていた。

「えっと…読んでた本はどこにやったかな？」

僕は昼休みになると本を読むことにしている。

特に推理小説なんかは自分で推理しながら読めるし、時々似たような事件に遭遇して解決の役に立ったりと、僕的にはオススメの本だ。

コンコン…

「先生、居ますか？」

「ああ、居るよ。入ってきて」

そう言って入ってきたシャーロック、そしてその後ろにネロがいた。
今は昼休みなのに…どうしたんだろう。

「こんにちは、先生！！」

「小林、もしかして一人？寂しいな」

「そうかな？僕は一人で本をじっくり読めるから大丈夫だけど」

「先生もやっぱり本読んだりするんですね」

「まあね。推理小説とかは自分で考えながら読めるからね」

「あれ…？この小説…」

「ネロも、この小説を読んでいるのかい？」

「いや、ボクは読んでないけど…確かエリーがこの前これを読んでた気がするんだ」

「エルキュールは本が好きだからね。君たちも、エルキュールから本を借りて読んでみたら？」

「まあ、機会があつたらね」

「そういえば先生、エリーさん知りませんか？」

「いや…知らないけど、エルキュールがどうかしたのかい？」

「昼休みだからみんなで弁当を食べようと思ったんだけど…エリーどこにもいないんだよね…」

「そうか…。PDAで連絡はとったかい？」

「何度も掛けてるんですけど…繋がらないんです…」

「…エルキュールの身に何かあったのか？」

いや、その可能性は低い。

今は昼休みだから学校内にはたくさんの方がいるし、それに何か不審な人物がいたら警備に捕まるはずだ…。

「もしかして…エリーさんに何かあったんでしょうか…？」

「まだ断言はできないけど、その可能性は低いと思うよ」

PDAの電源を切る必要があり、なおかつこの時間帯にエルキュールが行きそうな場所…

「…あそこかな」

「何？小林もしかしてわかったの！？」

「多分ね。ちょっと見てくるから待ってて」

「先生！！私たちも一緒に行きます！！」

「いや、もしエルキュールがここに来たら入れ違いになってしまう。だから君たちはここで待っててほしいんだ」

「そつか。じゃあ早く戻ってきてよ？ボクたちお腹ぺコぺコなんだからさ」

「ああ、わかったよ」

僕は急ぎでエルキュールが居そうな場所へ向かった。

「ここ、かな…？」

僕が向かった場所、それは図書館だ。

エルキュールは本が好きだから、もしかしてここで本を読んでいるかもしれない。

「ここなら居ると思うけど…」

僕は図書館の一角にある読書スペースに行った。

「あ、やっぱり居た」

そこには読書をしていたエルキユールが居た。

凄く真剣に読んでる…。

とても本が好きなんだな。

「…エルキユール」

「は、はい！？あ…、小林さん…でしたか…」

「シャーロックたちが探してるよ。一緒にお昼ご飯を食べたいんだって」

「はい…わかりました…」

「図書館に居るなんて、エルキユールはとても本が好きなんだね」

「…本の中には色々な世界が広がっているの…いろんなことを感じさせてくれますから…」

「そうだね、僕もそう思うよ。ところで、エルキユールはどんな本を読んでいたんだい？」

「え、えっと…」

僕がそう言った途端に、エルキユールは顔を赤くしてうつむいてしまった。

悪いかな、と思ったけれど、僕はちらっと本のタイトルを見た。

“ 恋の調査報告書 ”

「 ……！小林さん…見ましたか…！？ 」

「 う、うん…。恋愛小説…かな？ 」

「 ……はい 」

エルキュールはさらにうつむいてしまった。

そんなに見られなくなかったのかな…？

「 いや、エルキュールの年齢だったら恋愛に興味があっても普通だ
と思うよ？ 」

「 ……そう…ですね… 」

…あれ、墓穴掘った？

エルキュールは今にも倒れそうな状態だった。

「 （何とか話題を逸らさせなければ…） そ、そういえばエルキュール、何かオススメの本ってあるかい？ 」

「オススメの本…ですか…？」

ふう…。何とか話題は逸らせた。

「うん。僕も昼休みとかよく本を読んでいるんだけど、今読んでいる本がもうすぐ読み終わるから、何かオススメの本があれば読みたいな、って思ってたんだよ」

「…オススメの本、ですか…。…小林さんは、いつもどんな本を読んでいますか…？」

「最近は推理小説が多いかな」

「推理小説…。すみません…私、あまり推理小説は読んだことが無いので…」

「そっか…」

エルキュールでも読まない本があるんだ…。

「本当に…ごめんなさい…」

「大丈夫だよ、そんなに気にしないで」

…図書館には何かあるかな？

その前に教員はここで本が借りれるのか？

「…あの、小林さん…」

「どうしたんだい？エルキュール」

「…時間がありましたら…、今度一緒に…本を、見に行きませんか…？」

「え…？」

「駄目…ですか…？」

「いや、大丈夫だよ。…エルキュールがそうゆうことを誘ってくるなんて珍しいな、って思ってたね」

「私も…推理小説を…読んでみたかったから…」

「そっか。じゃあ今度の土曜日とか大丈夫？」

「…はい」

「それじゃあ楽しみにしてるよ、エルキュール」

「はい…！！私も…楽しみにしてます…！！」

「じゃあもうそろそろみんなのところに行こっか」

僕とエルキュールは図書館を後にし、事務所へ向かった。

土曜日…楽しみだな。

「先生……遅いですよ……！」

「二人とも、図書室で何してたの？」

「……めんね。少し図書室で話し込んだんじやって……」

「……ごめんなさい」

「謝らなくてもいいのよ、エリィ。さて……！……それじゃあお昼ご飯にしましろう……！教官も一緒にどうですか？」

「それじゃあ一緒に頂くとするよ。……っとその前に手を洗ってくる」

僕は部屋を出た。

「…それで、エリーは小林と何やってたの？」

「そうね。さつき教官が話し込んでたって言ってたけど…、何を話してたのかしら？」

「え…、何って…本の話…」

「具体的にはどうゆうことを話していたの？」

「私や小林さんが読んでも本とか…オススメの本とか…今度一緒に本を見に行くこととか…」

「エリーさん、先生と本を見に行くんですか？私も行きたいです！」

「止めときなよシャロ。いってもちんぷんかんぷんなだけだよ？」

「うっ…確かに…」

「それにせつかくエリーと小林のデートなんだから、二人だけで行かせてあげようよ」

「え…デ、デート…！？」

「だってそうでしょ？エリーと小林の二人っきりで行くんだから」

「ち、違う…！！私は…小林さんと二人で…本を見に行くってだけ」

で…」

「そうゆづのをデートって言つたのよ、エリー」

「まさかエリーがデートの約束をするなんてね」

「そうですか…なら仕方ないですね」

「だから…みんな、違う…!!」

「ただいま…って、みんなどうしたの？」

手を洗いにいつて帰ってきたら、なんだか事務所が変な空気になっていた（気がした）。

「な、何でもない…です…!!」

「そう？それならいいんだけど…」

その後、みんながニヤニヤしながら僕を見てたけど…気のせいだよね、うん。

土曜日…

「ごめんね、エルキュール。待った？」

「いいえ…私も…今来たところです…」

約束した通り、今日はエルキュールと一緒に近くの本屋に行く予定だ。

「それでは…小林さん…行きましょう…」

エルキュール、何故かそわそわしてる気がするんだけど…大丈夫かな？

「さて…何か面白そうなものはあるかな？」

本屋に着いて早速僕たちは本を探し始めた。

やっぱり図書室とは本の量が違うな…

「あれ…？この本…どこかで見たような…」

僕の目の前にある一冊の恋愛小説。

………

ああ思い出した！！

これはこの前エルキュールが読んでいたんだ。

「どんな本なんだろう…」

僕はその本を手に取り、適当に開いて読んでみた。

開いたページは、公園でヒロインが主人公に告白するシーン。

………

「…思いが通じて良かったね」

おっと、熟読しちゃった。

たまには恋愛小説も読んでみようかな…。

「…面白そうな小説が見つかって…良かったですね…」

「うん、一緒に探してくれてありがとね、エルキュール」

僕とエルキュールはそれぞれ一冊ずつ面白そうな本を見つけ購入した。

それに、今度前に僕が読んでいた小説をエルキュールに貸すつもりだ。

僕もエルキュールにあの恋愛小説借りようかな…。

「エルキュールは、これから行きたい場所はある？」

「…はい、一カ所だけあります…」

「何処に行きたいの？」

「それは…」

エルキュールが何かを言おうとしたとき…

ドン！！

「きゃあー!!」

「大丈夫!? エルキュール!!」

「はい… 大丈夫… あれ、本が… 無い?」

「何だって!? …もしかして、さっきの…」

確認すると、確かにさっきぶつかった奴がエルキュールが買った本を持っていた。

「待て!!」

「小林さん…!!」

僕はすぐにひったくり犯を追いかけた。

くそ… 結構足が早い…!!

「あいつ… 何処に行った…!!」
「落ち着け。」

あのスピードならまだ遠くへは行けないはず…。

この近くをくまなく探せば…

「ギャアアアア…!!」

!?

何だ、今の悲鳴は？

僕は悲鳴があつた場所へ向かった。

悲鳴があつた場所へ向かうとそこには…エルキュール以外のミルキイメンバーと、ボロボロになったひつたくり犯がいた…。

「あ、こんにちは、教官」

「う、うん…えっと…この状況は…?」

「見ての通り、ひったくり犯を捕まえておいたよ」

「あ、ありがとう…。あと、ひったくり犯の右腕と左足が逆に曲がってるのは…どうして？」

「悪いことしたからちよつとしたお仕置きだよ。オ・シ・オ・キ」

うん、全然ちよつとじゃないよね。

ひったくり犯、白目むいて気絶してるけど…。

「はい、先生！！これエリーさんの本ですよね？」

「あれ？どうしてこれがエルキュールのだって知ってるんだい？」

「街歩いてたらいきなりエリーさんがひったくりに襲われてるんですよ？びっくりしましたよ！！」

「そっか。ありがとね、みんな」

「ひったくり犯は警察に引き渡しておきます。教官は早くエリーのところへ行ってください。きっと待ってますよ？」

「わかった。それじゃお礼はまたいつかするから！！」

僕は急いでエルキュールのところへ向かった。

「…!!小林さん…大丈夫、ですか…!?!」

「うん、大丈夫だよ。はい、これエルキュールの本」

「は、はい…ありがとうございます…」

その後、エルキュールは急に泣き出してしまった。

「ごめんなさい…小林さん…私、いつも迷惑をかけてばかり…」

「いや、そんなことはないよ。僕だっていつもエルキュールに助けてもらってばかりだったじゃないか」

「そう…ですか…?」

「うん、そうだよ。今だって僕は一人じゃ何も出来ない。だからエルキュール、これからも助けてもらうかもしれないよ?」

「でも…私、 Toysが無くて…」

「Toysなんか関係無い。僕は君のToysを頼っているわけじゃない。エルキュール・バートンという一人の人間を頼りにしてるんだ」

「私…迷惑なんかじゃ…ないんですか…？」

「ああ。だからこれからも頼むよ、エルキュール」

「…はい!!」

その後、僕はエルキュールが行きたかった場所へ向かった。

「ここは…公園？」

「はい…。あそこのベンチに座りましょう…」

僕とエルキュールは近くにあったベンチに座った。

今の時刻は6時を過ぎ、街の電灯もついているぐらい暗い。

「エルキュールはどうしてここに来たいって思ったの？」

「えっと…それは…秘密、です…」

「そっか…」

「小林さん…」

「どうしたの、エルキュール？」

エルキュールは突然僕の肩に寄り掛かってきた。

何だか…恥ずかしい…。

「私…怖かったです…」

「えっ…？」

「さっき…本を奪われて…小林さんがすぐに追い掛けて行ったけど…、もし小林さんが怪我でもしたら…て思ったら…、私…とても怖くて…」

「……………」

「でも…小林さんはちゃんと戻ってきてくれました…。…あのときの小林さん…とても…格好良かったです」

「そ、そう…？ありがとね」

「人の為に全力で行動できる…。私…、そんな優しい小林さんのこと…」

ニャー

「…？猫の鳴き声、かな？」

「…かまぼこ！？」

僕たちの近くにいた猫をエルキュールはかまぼこと呼んでいた。

エルキュールはこの猫を知ってるのかな…？

「かまぼこどこにいるの…！」

「…シャロ…？」

「あ、エリーさん…！それに先生も…！すいません、かまぼこを…
…あ、いた…！かまぼこ…！」

「ニャー」

「シャロ…！こんなところにいたのね！？それに教官とエリーも！

！みんな遅くまで外出し過ぎです！！さあ帰りましょう！！」

「え？ええ！？」

シャーロックとエルキュールはコーデリアに引っ張られて連れてかれた。

「せっかくいい雰囲気だったのに…残念だったね、エリー」

「…！！」

エルキュールが顔を赤くしてるけど…何かあったのかな？

そういえば、さっきのエルキュールの行動、どこかで…

………

そうだ！！あの恋愛小説の告白のシーンに似ていたんだ！！

…あれ？だとするとエルキュールは僕に告白を…？

………

まさか、ね。

第5話 本好きエルキユール（後書き）

「いや、エリーさんも大胆なことしましたね〜！」

「そうね…。普段のエリーからじゃ考えられないわ。あ、それと後書きにはネロに代わって、コーデリア・グラウカがお送りします！」

シャロは2回連続出演だね。エリーには代われなかったの？

「エリーさん、大胆なことし過ぎたって部屋でうずくまっていますよ」

うつ…。エリーさんすいません…。

「そういえば、この小説のタイトルってほとんどW〇のカードの名前からとってませんか？」

うん。なかなか思い付かなくて…

「ネロの回なんてカード名そのまま使ってますからね…」

当分の間、〇Sのカードにはお世話になります。

「さて…。みんなの回が終わって次はやっと私の回ね」

そうだね。次はコーデリアの回だね。はあ…。

「ちょっと！何でそこで溜め息を吐くんですか！？」

だって…なかなか思い付かないんだもん…。

「頑張ってくださいよ！私だけ話が無いのは嫌ですよ！！」

はい…頑張ります…。

「こんな作者さんですけど、これからも応援よろしくお願いします
！！」

第6話 チームのリーダー？コーデリア（前書き）

今回のゲストは…

「エルキュール…バートンと…」

「小林オペラです。どうぞお見知り置きを」

さて…今回はコーデリアの回ですが…

「前回の後書きのとき、コーデリアの回は全然浮かばないって言うてなかったですか？」

うん。そうだったけど、友達からのアドバイスや昨日届いたDVDを見てやっと書き終わりました。

「お疲れ様…でした…」

ありがとね。

さて…それでは…

「」「」「どうぞー！」「」

第6話 チームのリーダー？コーデリア

ある日の午後…

「うう…なんでボクがこんなこと…」

「まあ文句を言っても仕方ないよ。ネロ、その雑巾とって」

僕たちは今、事務所の掃除をしている。

何故かって？それは…

「失礼します、教官」

「うん、いらっしやい、みんな」

さかのぼること数時間前…

ミルキイのみんなは昼食を事務所で食べたいうことでここに集ま

っていた。

みんなここが一番居心地がいいらしい。

「わあ…コーデリアさん、今日はたくさん作ってきましたね〜!」

「ええ。今日はみんなだけじゃなくて、教官にも食べて貰えると思
ったから…」

「そう…。ありがとね、コーデリア」

「い、いえ!お気になさらずに!」

僕のためにこんなに作ってきて貰えるなんて…

やっぱり優しいな、コーデリアは。

「でもさ、こんなにたくさんあるとこの机だけじゃちょっと小さく
ない?」

「確かに…。小林さん…他に机って…ありましたか…?」

「待ってて。探してくる」

みんなには待ってもらって、少し辺りを物色し始める。

…見付からないな…。

「ゴホっ…ゴホっ…!!」

「大丈夫ですか！？教官!!」

「うん、大丈夫…。少し辺りが埃っぽくて…」

「埃っぽいて…。教官、掃除してないんですか!？」

「そんなに細かくはしてないな…。あと、ここって僕が居なくなつてから誰も入ってないでしょ？結構埃が被っている場所が多いんだ」

「そんな…だったら早く綺麗にしないと!」

そう言ったコーデリアはすぐに弁当をしまい始めた。

「…えっと。一応聞くけど、今から何するつもりなの？コーデリア」

「決まってるでしょ！？大掃除よ!!」

「ええ!？」

「はあ…やっぱり…」

…という感じで大掃除中です。

昼休みの間に終わるかな…？これ…

「まったく…きちんと掃除していないからこんな状態になるんですよ？教官も定期的に掃除する癖を付けておいてください！」

「うつ…返す言葉が無い…」

「大変ですね…でも、頑張ってください、先生！」

「シャロも、それにみんなも同じよ！！私が掃除しに行かないとすぐに部屋を汚すんだから…」

「まったく…、コーデリアは細か過ぎるんだよ…」

「わ、私は不衛生な環境だとみんなが病気にならないか心配で言うてるの！」

「二人とも…けんかは…駄目…」

「そうだよ。それに、早く終わらせないと昼休みが無くなっちゃう

よ？」

「…そうですね。それじゃあ早く終わらせましょう。ほらネロ！もつとやる気を出して！！」

「はい…」

結局掃除が終わったのは昼休みが終わる直前になってしまった…。

「ふう…」

「今日のお昼はお疲れ様、コーディネリア」

「あ、教官…」

放課後…今日来たのは珍しくコーディネリア一人だった。

「はい、これをどうぞ」

「教官、これは…」

「コーデリアは紅茶が好きだったでしょ？僕が入れたものだからあまり美味しくないかもしれないけど…」

「い、いえ！そんなことないです！！ありがとうございます、教官！」

コーデリアは僕が入れた紅茶を手に取り、飲み始めた。

「あ…美味しい…」

「そう？ありがとね」

紅茶入れるのは今日が初めてだったけど…ちゃんと出来て良かった。

「…ねえ、コーデリア」

「どうしました？教官」

「君はミルクイのみんなをとて大切に思ってるよね」

「え、ええ…。私はミルクイの中で最年長なので、しっかりしなきゃ…とはいつも思っています」

「でも…僕が見た感じでは、君は少し頑張り過ぎてる感じがするよ」

「え…そ、そうでしょうか…？」

確かにコーデリアはみんなのリーダー的存在で、いつもみんなをまとめてくれている。

だけど…少し頑張り過ぎな気がする。

このままだと彼女が倒れてしまわないか心配だ…。

「だから少し肩の力を抜いてリラックスしたら？」

「で、でも今のミルキィホームズだと色々心配なんです！だから、私がしっかりしていないと…」

「大丈夫だよ。みんな、君が思ってる以上に子供じゃない気がするよ？」

「そう、でしょうか…？」

「うん、だから君も少しリラックスしてね。君が倒れてしまうんじゃないかって、いつも心配になるから…」

「教官…私のこと、心配してくれるんですか…？」

「う、うん。もちろんだよ」

「…ありがとうございます。私、とっても嬉しいです…！」

コーデリアは笑顔を見せてくれた。

こういう笑顔を見ると、とても癒された気分になる。

この後、僕は少しの間コーデリアと雑談していた…。

翌日…

「本当に綺麗になったよね。この事務所…」

昨日まで全然手を付けていなかった場所まで掃除されてる…。

コーデリアって本当に掃除が好きなんだな…。

「そういえば…今日、コーデリアさん少し様子がおかしくなかったですか？」

「そう？ボクが見た感じはいつも通りに見えたけど？」

「様子がおかしいって…コーデリア、どんな様子だったんだい？」

「歩いているときに少しふらついてた気がするんですけど…私の気のせいでしょうか？」

「そうか…少し気になるから、コーディネアを探してくる」

「わかった。もし何かあったら、ボクたちのPDAに連絡してね」

「うん。それじゃ行ってくる！」

僕は急いでコーディネアの元へ向かった。

大丈夫かな…？コーディネア。

「コーディネア…！」

「あ…教官…。どうかなさいましたか…？」

10分後、校舎内を歩いていたコーディネアを見つけた。

見た感じはいつも通りだけど…

「いや、コーディネアの様子がおかしいってシャーロックが言ってたから心配になって見に来ただけど…」

「そうですか…心遣い、ありがとございます。でも、私はいつも通りなので大丈夫ですよ」

「そう？それならいいんだけど…」

「それでは、失礼します」

コーデリアは行ってしまったけど、歩いているとき少しふらついていたのでやっぱり心配…

ドサッ…

！？

「大丈夫！？コーデリア！」

歩いていたコーデリアは急に倒れてしまった。

早く保健室に連れて行かないと…！

「よつと…」

僕はコーデリアを抱えて急いで保健室にむかった…

「…あれ？ここは…」

「あ、気が付いた？コーデリア」

「教官…私、さっきまで廊下にいたはずなのに…」

「倒れたんだよ。多分、疲れが溜まっていたんじゃないかな？」

「そう、だったんですか…」

「まあ今はゆっくり休んだほうがいいよ」

「でも…私、今からやる事があるので」

そう言ってコーデリアは立ち上がろうとする。

「…うつ！」

「駄目だ！まだ完全に治ったわけじゃないんだから！！」

「でも…私、行かないと…」

「…ねえコーデリア。君がそんな状態になるまで行かなきゃいけない用事って、何？」

「…教官、この前図書室に行きましたよね？」

「う、うん。エルキュールを探しに行ったときにね」

「あそこには、たくさんの本があるじゃないですか」

「そうだね。何か探してる本でもあるのかい？」

「こんな状態になるまで探している本って…一体何なんだ？」

「あんなに本があつたら…、一冊ぐらいあるかもしれないじゃないですか…トイズを元に戻すための方法がわかる本が」

「トイズを…元に戻す？」

「はい。みんなトイズがないから退学になるかもしれない…。だから」

「早くトイズを元に戻さないと…」

「なるほど…君の言いたいことはわかった。…でも、倒れるまでやったら駄目だよ」

「でも…」

「君たちはチームなんだ。だから大変だったらみんなで協力すればいい。それに、僕だっている。一人て抱え込まなくても大丈夫だよ」

「そう、ですよ…。ありがとうございます、教官！」

「少しは良くなった？」

「はい。教官が看病してくれたおかげです」

「はは…大袈裟だな…」

「それじゃあ、私はみんなのところに戻ります」

「コーデリアが立ち上がろうとしたとき…」

パッ…

「あれ…停電？」

珍しいな、こんな何も無い日に停電なんて…。

「キャアアアア！！」

「うわ！大丈夫、コーデリア？」

「わ、私暗いの駄目なんです…！」

「と、とりあえず落ち着いてコーデリア。そうしないと、こ、呼吸が…」

「お、落ち着いたかい？」

「は、はい…失礼しました…教官」

「大丈夫、気にしないでいいよ。…それよりもうそろそろ離れてもいいんじゃないかな？」

冷静に今の状況を把握すると、コーデリアが僕に抱き着いている…。

これは…結構恥ずかしい。

「…もう少し、このままでいいですか？もしかしたらまた立ち眩みがあるかもしれないので…」

「そ、そう。わ、わかった…」

コーデリアはそう言っていたけど、僕は内心ドキドキしっぱなしだった…。

「あの…教官…」

「な、なんだい？」

コーデリアが話し掛けてくる。

もちろん、抱き着いたままで。

「教官は…いつも優しいですね…」

「そうかな…？」

「ええ…私が失敗したときだって、いつも怒らずに笑顔でいてくれて…、今回のことだって教官はずっと私のそばにいてくれていました…」

「そ、そりゃ、だって…コーデリアは大切な生徒だし…」

「大切な生徒、ですか…。教官は私のことを生徒としか見てくれないかもしれないけど…、私にとって教官はただの先生なんかじゃないですからね…」

「え…？それは、どうゆっ…」

「教官…私、遊園地の観覧車の中で何をしたか、覚えていますか？」

「ああ、うん、覚えてるよ。コーデリア、何か言おうとしてたよね。」

色々あつて最後まで聞けなかったけど…」

「あのときは最後まで言えなかった…。でも、今なら言える…。私…！教官の…！いえ！あなたの…ことが…」

パツ…！

「あ…明るくなつ…」

「小林ー！ここー！？」

「小林さん…！いますか…！？」

僕を探していたらしいネロとエルキュールが保健室に入ってきた。

でも…今コーデリアは僕にだ、抱き着いてる状態なわけ…。

「…ふん」

「あ、えつと…ふ、二人とも、ごゆつくり…！」

ネロはニヤニヤしながら、エルキュールは顔を赤くして保健室を出ていった。

まあ当然誤解されるよね…

「先生、コーディアさん！大丈夫…で、ネロ！？なんで入れてくれな
いんですか！？」

「今は二人とも取り込み中だったからね。また後から来よう」

「そうですか…なら仕方ないですね」

「待つて！誤解だ、誤解なんだ！」

「そうよ！だから、とりあえず話を聞いて！！」

この後誤解は解けたものの、当分の間みんなから冷たい視線で見られた…。

第6話 チームのリーダー？コーデリア（後書き）

誤解は解けた？

「はい…すみません、小林さん…」

「いや、わかってもらえたならいいよ」

全く…小林はすぐにみんなに手をだすんだから…

「それを書いているのはあなたじゃないですか!？」

…さあて、なんのことだか…

「ここでしらを切るのか…」

「それより…みんなの回が終わりましたけど…次回は…？」

ああ、次回はミルキィホームズの最大の宿敵をだす（予定）です！

「予定なんだ…まあ頑張ってください」

小林もこれ以上フラグを立てないように頑張って

「…フラグって何？エルキュール」

「…さ、さあ…よく…わかりま…せん…」

「顔が赤いけど、大丈夫？」

「は、はい！大丈夫…です…！」

「…？」

それではまた次回…！

第7話 復活 怪盗帝国！？（前書き）

久しぶりの投稿です。

シャロ「ついに来たんですね…怪盗帝国が…」

エリー「私達…トイズが無いけど…大丈夫かな…？」

シャロ「大丈夫ですよ！！先生もいるんですし。」

それに今回は怪盗だけじゃなくてG4も登場するよ。

シャロ「そうなんですか！？久しぶりに小衣ちゃんに会えます！！」

エリー「そうですね…最近あまり会ってませんし…」

G4と怪盗が登場する第7話。それでは…

「」「ぶっぞー！！」「」

第7話 復活 怪盗帝国！？

「ごきげんよう、皆様…。私は怪盗帝国の首領、アルセーヌ…。以前私はこのヨコハマを怪盗の街にしようとし…。失敗しました。ですが、私は再びこの偵都ヨコハマの怪盗帝国化を宣言します…。！この素晴らしい街、ヨコハマを私のものにするために…。怪盗帝国の復活の記念に、私は明日の深夜0時に偵都ヨコハマ美術館の“アダムの碧玉”を頂いていきます…。さあ…。明日の夜、美しいショーの始まりです。では偵都ヨコハマの皆様、次はこのヨコハマが怪盗の街になってからお会いしましょう…」

「アンリエットさん…これは…？」

僕たちが見せられた映像…。それは昔と同じようなアルセーヌの怪盗帝国宣言だった。

「ご覧の通り、怪盗は再び怪盗帝国を結成しようとしています…」

「先生がいない間も怪盗アルセーヌは盗みを繰り返していました」

「もしかしたら今までの行動はこの怪盗帝国の再結成が目的だったのかもしれないね」

「アンリエットさん、あなたはなぜ僕にこれを？」

「小林さん、あなたには以前と同じように再び怪盗帝国と戦ってほしいのです」

「え…、僕が…ですか？」

「ええ。以前ミルキイホームズと共に怪盗帝国を追い詰め、さらに怪盗しも倒しヨコハマを救った小林さんなら、今回も怪盗と戦えると思っています」

「それは、もちろん彼女たちも一緒ってことですよね？」

「はい。ミルキイホームズにも怪盗と戦ってもらいます。それであなたちの探偵としての実力もあがるし、もしかしたらトイズが戻るかもしれません」

「……………」

実を言うと僕は彼女たちを怪盗と戦わせるのには抵抗があった。

今の彼女たちにはトイズが無い。

そんな状態で怪盗と戦うのは危険すぎる…。

「どう…しました…？小林さん…」

「僕は…この戦いに君たちを連れていくか、迷ってる。トイズを持つていない君たちにこの戦いは…危険だ」

「そんな…！先生、お願いします！私たちも連れてってください！」

「……………」

「大丈夫ですよ、教官。トイズが無くても私たちは探偵なんです。怪盗が悪事を働くのを黙って見てるなんて出来ません！！」

「それにさ、G4だってトイズが無くても頑張ってるんだ。それだったらボクたちだって出来ると思うよ？」

「そう…だよ。僕は何を迷っていたんだ」

「ミルキィホームズのチームワークなら例えトイズが無くたって大丈夫。」

「僕は、そう信じる。」

「アンリエットさん…僕、やります。今度こそ必ず怪盗を捕まえてみせます！」

「わかりました。それでは今回こそ必ず怪盗を捕まえて下さいね、小林さん」

「はい!!」

僕はみんなと一緒に再び怪盗と戦う決意をした。

「でも…怪盗と戦うっていつでも、私たちはこれからどうすればいいんでしょう?」

「今僕たちが持っている情報は少ない。だから今ある情報を頼りに怪盗を追っていい」

「私たちが今ある情報といえば…」

「怪盗からの犯行予告、だね?」

「うん。だから明日の深夜に僕たちも予告現場に行ってみようと思う」

「でも教官。明日の深夜0時までまだ時間があります。その時間の中で出来ることってありませんか?」

「そうだな…」

待っている時間で出来ること…
何かあるかな…？

「あの…小林さん…」

「どうしたの？エルキュール」

「警察に…話を聞くのは…どうでしょうか…？」

「そうか…警察なら怪盗の情報を他にも持っているかもしれないからね」

「でも警察が簡単に情報を渡してくれるかな？」

「そこは僕が交渉してみるよ。ありがとね、エルキュール。君のおかげでやれることが出来たよ」

「いえ…お役に立てて…嬉しいです…」

僕たちはすぐに警察署へ向かった。

「着きました！警察署です！」

僕たちは近くにある警察署に到着した。

「それでどうするの？このまま行っても何も教えてくれないと思うけど」

「みんなちょっと待ってて。話を聞けるように頼んでくる」

「どうでしたか、？教官」

「全部じゃないけど、少しだけなら話してもらえようになったよ」

「良かった…」

「案内してくれるらしいから、みんな行こう」

「ここが指定された場所だけど…」

「警察の人、遅いですね…」

案内された客室で僕たちは警察を待っているんだけど…

「誰よ！？あたしたちに話がある探偵って！！あたしたちは忙しい…
…ってあんたたち！？」

「あ、小衣ちゃん！お久しぶりです！！」

「小衣ちゃん言うな〜！」

ドカツ！！

「ぐはっ…！！」

シャーロックは小衣ちゃん…いや、小衣君の華麗なドロップキックを喰らって倒れた…。

「だ、大丈夫！？シャーロ！？」

「うう…久しぶりに会ったのに…ひどいですよ…小衣ちゃん…」

「だから小衣ちゃん言うなって言ってるでしょ…！それより何であんな達がここにいるのよ！？」

「何でって…怪盗についての話を聞きに来たんだよ。さつき自分て言ってたじゃん」

「何であんた達に怪盗のことを教えないといけないのよ…！」

「まあまあそう怒るなよ、小衣。別に大丈夫なんじゃない？教えても」

「次子は楽観的すぎるのよ…！ほら、平乃と咲も何か言ってるよ！」

「…別に教えても問題ないと思われませんか？」

「いゝんじゃない？調査が楽になるし」

「何であんた達そんなに探偵に協力的なのよ…！」

「騒がしいぞ、小衣」

「あ、すいません警視…！」

「やっぱり、あいつも戻っていたのか。」

「…久しぶりだな、神津」

「…小林！？お前、留学から戻っていたのか！？」

「うん。少し前にね」

「久しぶりだな！旦那！！」

「お元気で何よりです。小林さん」

「ちゝす。久しぶりゝ」

「…ふん！！」

「G4のみんなも元気そうでしたよ」

確実に一人からは歓迎されて無かったけど。

「神津、お前もまたG4の率いるように命じられたのか？」

「まあ…。再び怪盗が組織化しはじめているから…。お前も、またミルキイホームズと怪盗を追っているようだが…」

「うん。僕もまたこの子達のエデュケーションをやっていてね」

「そういえば、ミルキイホームズはトイズを失ったという噂を耳にしたのだが…本当なのか？」

「…本当だ。そのために彼女達は今退学の危機に陥っている。だから僕が先生として彼女達を退学にさせないようにしてるんだよ」

「そうか…」

「そんなことより警視！こいつらに情報を提供しちゃうんですか！？」

おっと話が逸れちゃったかな。

「…話を元に戻す。今回の事件の情報は警察独自で調査した情報だ。簡単に教えるわけにはいかない」

「そうか…」

まあそう簡単に教えてもらえないわけがない。

さて…どうしようかな…。

「小林、お前は怪盗が狙っているものを知っているか？」

「ああ、アダムの碧玉…だっけ？」

「そうだ。…アダムの涙と同じく、名前に“アダム”が付いている…」

「…！！」

アダムの涙…

僕がトイズを失うきっかけとなった宝石…

「お前はこの二つの宝石に何か関連性があると思うか？」

「…わからない。ただ、怪盗がそれを盗もうとするなら、それを阻止するのが探偵の仕事だ」

「それで、お前や…あの子達が危険に晒されるかもしれない…それでもか？」

神津はミルキイホームズのみんなを見た。

そんなの…答えは決まってる。

「…ああ、もうみんなで覚悟は決めた。どんなに危険なことであっても必ず怪盗を捕まえるって。それに、もしかしたらアダムの碧玉には彼女達のトイズを元に戻す手掛かりがあるかもしれないからね」

「そうか…」

神津は少し考え込んだ後…

「…明日の深夜、ヨコハマ美術館に来い」

「え…？」

「警察が警備を任された場所に、特別にお前達の入室を許可する…」

「い、いいんですか！？警視！？もしかしたらこいつらあたし達の邪魔をするかもしれませんよ！？」

「少し黙っている、小衣」

「は、はい…」

「…ありがとう、神津」

「勘違いするな…。お前達が居ると捜査が楽になる…。それだけだ」

「そうか…。だったとしても礼は言っておくよ。ありがとう」

「……………」

「それじゃG4のみんな、今日はありがとう。みんな、事務所に戻ろう」

僕達が部屋を出ようとしたとき…

「…待て、小林。少し聞きたいことがある」

「あ、ああ…。どうかしたのか？」

急に神津に呼び止められた。

聞きたいことって一体…？

「以前、お前と同じように俺は外国へ仕事に行ったが…、その時に聞いた話によると…最近探偵、怪盗問わずトイズが消えるという事件が起こっているらしい…」

「何だって…！？」

トイズが消えただって…？

それは僕とミルキィホームズのみんなだけじゃ無かったっていうのか！？

「私達みたいな人が…今世界で増えているってこと…ですか？」

「そういうことだ。さっきの反応から察するに、お前達はこの事を知らなかったのか？」

「ああ…。すまないが僕から提供出来る情報は何も無さそうだ…」

「…この事は、今警察が極秘で調査している情報だ。知らなくて当然だろう」

「極秘で調べているのに、僕達に教えて大丈夫なのか？」

「お前達なら他言はしないだろう…。それにお前はミルキイホームズを退学にはさせないのだろう？なら、お前もこの事件を調べて早くトイズを取り戻せ…」

「…わかった。神津、それからG4のみんな、明日の夜にまた」

こうして僕達は警察署を後にした。

「警視…あの事、教えても大丈夫だったんでしょか…？」

「小林の事だ…何も問題はない」

「でも…」

「旦那達なら大丈夫だって！！小衣は心配し過ぎだよ」

「そんなに口が軽いなら、探偵なんてやってられないと思うけどね」
「」

「小衣さん、もう少し探偵を信用してもよろしいのではないでしゅか？」

「探偵を…信用なんて…」

「…無駄話はここまでだ。お前達、すぐに事件の調査に行くぞ」

「」「」「はい！」「」「」

「（…世界中の人々のトイズの消失…。今、この世界では何が起きているというんだ…？）」

「トイズが失われるとはね…。僕達以外にもいるなんて…」

事務所に戻ってきて、僕は神津から聞いたトイズ消失事件について考えていた。

「（こんなにたくさん起こっているならもう偶然とは思えない。原因はなんなんだ…？）」

「教官、どうしたんですか？」

「ああ…ちょっとトイズの消失について考えていてね。今は怪盗事

件のほうが重要だったね、ごめん。」

「いえ、そのことはいいんです。私達も気になっていましたし。」

「ボク達以外にもトイズを失った人がいるなら、絶対何か原因があると思うんだよ。」

「うん。僕もその可能性を考えていた。」

「小林さんは…何が原因だと…思いますか…?」

「うーん…今の状況だと情報が少なすぎるから何も言えないな…」

「そうですね…。大丈夫ですよ、先生！！私達なら必ずこの謎を解明出来ますよ！！」

「シャーロックはどうしてそう思うんだい？」

「シャーロックは凄い自信がありそうだけど…何か理由があるのかな？」

「それは…探偵としての勘です！」

「シャロの勘が当たったところ、ボクあんまり見たことないけどね。」

「そ、そんなことないですよ！たまに当たりますよ、私の勘！！」

「たまになんだ…」

「まあ何回も当たっていたら逆に怖いけど。」

「教官、今はそのことよりも先に怪盗の方を考えましょう。」

「うん、そうだね。」

「皆さんたまには私の勘を信用して下さいよう！！！」

こんな風に話しながら僕達は怪盗の事件を調べていった…。

翌日の深夜…

ヨコハマ美術館に着いた僕達はアダムの碧玉が飾られている部屋へ案内された。

「ここが今日あなた方が警備する部屋です。」

「わかりました。案内、ありがとうございます。」

「わあゝあれがアダムの碧玉なんですわね!!」

「あ、駄目よシャロ!!そんなに走って行ったら…」

…元気だな、シャーロックは…。

「それでは…私はここで…」

「あ、はい。警備頑張ってください。」

案内してくれた警察の人は自分の警備の場所に戻っていった…あれ、あの人が落としていった？

これは…なんで警察がこんなものを…？

「先生!! G4の皆さんが来ました!!」

待機していて数分後… G4のみんなが到着した。

「今日は一緒に頑張ろうね、小衣ちゃん!!」

「小衣ちゃん言うな〜!」

「ずいぶんと遅い到着だな、神津」

「小林…お前どうしてこの部屋の場所がわかった？」

「え…どうしてって警察の人に案内されてきたんだけど…?」

「…今日この警備を任されたのは、俺とG4だけだった。他の者には誰にも教えていないはずだ…」

「何…それならどうして…!？」

「多分、上層部から案内がきたのだろう。俺はここを知っていたから良かったのだが…」

「僕はここを知らなかったし、助かったよ。」

「…自分が警備する場所ぐらい調べておけ。」

「これからはそうするよ。」

そう言って神津は警備に向かった。

「……………」

あの案内してくれた警察…。

…何か怪しい。

「怪盗はいつ来るんでしょう…」

「さあね。でも油断はしないほうがいいと思うよ。」

パッ……

「キャアー!!」

「落ち着いて…コーデリアさん…」

「停電か？こんなときに…。」

「咲、非常用電源をつけるんだ」

「はい」

「よし…電気がついた！！」

「小林さん…アダムの碧玉が…！！」

「無くなってる…」

停電の間に盗まれたのだろうか？

アダムの碧玉はあった場所から姿を消していた。

「G4、怪盗を搜索しろ。停電の間に盗まれたのなら、まだそんなに遠くへは行ってないはずだ。」

「神津警視！！怪盗はこちらに逃げました！！」

あの人は…さっき案内してくれた警察官？

「…わかった、行くぞ」

神津はG4を連れて怪盗が逃げたらしい場所へ向かった。

「先生、私達も行きましょうー!!」

「早くしないと怪盗が逃げちゃうよー!!」

「慌てないでみんな。それに行っても怪盗はいないと思うよ。」

「どうゆう事…ですか…?」

「怪盗はここに居るということだよ。そうですね、警察官さん…
いや、怪盗トウエンティ。」

「え…!?!」

僕の発言に慌てた警察官は

「な、何を言っているんですか!?!どうして私が怪盗になるんですか?」

「理由は二つある。一つ目は、今日のここの警備は僕達とG4のみ
んなだけという事。だからここには他の警察なんて居るはずが無い
んだ。」

「なるほど…。そうするとこの人がここにいるのはおかしいですね。

」

「二つ目は…これだ。」

僕が取り出したもの、それは…

「…トランプ？」

「このトランプはこの人が僕達のところから居なくなるときに落としたものだ。以前僕達がトゥエンティと戦ったときの物と全く同じ物だった。」

「確かによく見たら怪盗が使っていたものにそっくりです。」

「以上の二点に加えて、さらにトゥエンティのトイズは変装。これらのことからわかることは、あなたが怪盗トゥエンティだということだ！―」

どうだ…？

「ふふ…さすが小林オペラ。僕の素晴らしい変装を見破るなんて…」

「やっぱり…。アダムの碧玉をどこへやった!!」

「ああ…それならまだそこにあるよ。」

アダムの碧玉が置いてあった場所を見ると、さっきまで影も形もなかったのに今は何も無かったかのように置いてあった。

「ちょっと工夫してアダムの碧玉だけを見えなくしていたんだよ。
…君達がいなくなった後にゆつくりと頂いていくためにね。」

「だけど僕達はここにいる。さあ、観念しろトウエンティ!!」

「この美しい僕がそう簡単に捕まると思っているのかい？」

「何!？」

トウエンティの言葉に反応したかのように、あいつの後ろから二人の人影が見えた。

「全く…ちゃんと全員外に連れていけよ、トウエンティ。」

「変装していても僕は美しすぎるからね。ばれるのは仕方がないことだ。」

「…このままでは、アルセーヌ様の計画が台無しになる。」

「あなた達は怪盗ストーンリバーと怪盗…ラビット!!」

「ラットだよ！！いい加減に覚えろ！！」

「無駄話をしている時間は無い…手短に片付けるぞ！！」

そう言ったストーンリバーは僕に向かって剣を振り下ろしてきた！！

「ふん！はあ！せいっ！！」

「くっ…！！」

正直、避けるだけで精一杯だ。それに加えて向こうにはトゥエンティとラットもいる。彼女達も守らないといけない…絶体絶命だった。

「これ以上時間をかけてらんないよ！！少し派手にやっちゃうけど、いいよね？」

「…仕方がない、やるんだラット。」

「言われなくても、くらえ！！ラット様特製爆弾を！！」

「まずい…！！みんな、逃げて！！」

そう言ったときにはもう手遅れ。

ラットの手からは爆弾は離れていた。

僕はこんなところで終わってしまうのか…？

なら…せめて彼女達だけでも！！

「先生！？」

「ちょっと小林！！何してるんだよ！？」

「せめて君達だけでも助かるように…てね。」

今僕はみんなを爆弾から庇うように立っている。

僕一人じゃ完全に防ぐことは出来ないけど、彼女達を少しでも爆風から防げればいい。

「そんなことしたら…小林さんは…！？」

「まあ…無事じゃ済まないだろうね。」

「このままだと…教官、死んでしまいます…！」

…もうすぐ爆弾は爆発するだろう。

確かに死んじやうかもしれないけど…それでみんなの命が助かるのなら…。

「先生が…死んじゃう…そんなの…絶対に…ダメー!!」

叫んだシャーロックの目に光が…

あれは…トイズ!?

シャーロックのトイズは僕の後ろにあった爆弾を窓の外に放り投げ
てくれた。

ドカーン!!

そして窓の外で爆発した。

…あれをくらっていたらさすがに死んでいたかもしれない…。

「シャーロ!!トイズが…」

「えへへ…先生を…守りました…。」

パタリ…

「シャーロック!!」

トイズを使った途端に倒れてしまったシャーロック。

トイズの使用が体に大きな負担をかけたのだらう…。

「そんな…あいつのトイズ、戻っちゃったの!？」

「まだわからん…。だが倒れているならトイズは使えないだらう。」

「ならもう一度やってやる!!くらえ俺様の爆弾を…って、あれ？」

…どうしたんだらう。

ラットは一向に僕達に爆弾を投げなかった。

「どうしたんだい？ラット。」

「トイズが…使えない…。」

「…なんだと!？」

ラットがトイズを使えない？

一体何があつたんだ…？

「おいおい、ふざけている場合じゃないんだよ?。」

「何でこんな状況でふざけないといけないんだよ！！本当に使えなくなっただよー！！」

「ラットの爆弾無しでこの場を乗り切るのは難しい…。それにもうすぐ警察も戻ってくる…。仕方ない、退くぞトウエンティ、ラット。」

「ミルキイホームズのみんな、再び僕の美しいショーに期待してくれ！！」

「くそ…。なんで、トイズが…？」

怪盗はそのまま去っていった…。

シャーロックのトイズが戻ったことや、ラットのトイズが失われたこと…。色々謎はあるけど、とりあえず今はアダムの碧玉が守れただけ良ししよう。

「大丈夫？ シャロ。」

「はい…。まだ少しクラクラしますが…。何とか大丈夫です。」

「シャロ…。トイズ…。戻ったの？」

「いえ…。多分また消えちゃったと思います。さっきから近くの物に念じてても全く動きませんから…。」

「そつか…でもシャーロックが無事で良かったよ。」

「私も…先生が無事で本当に良かったです。」

「もしシャーロックがいなかったら、僕は死んでいたかもしれないだから…」

僕はシャーロックの体を抱きしめた。

「…本当にありがとう、シャーロック。」

「…先生が、生きていて良かった。本当に…良かった…!!」

シャーロックは涙を流していた。

僕も少し泣きそうだったけど、我慢してた。

「落ち着いた？シャーロック。」

「はい…。それと…少し苦しいです。それに…恥ずかしいですよ…。」

「あ…」

そつえばシャーロックが泣き止むまでずっと抱きついてたっけ…。

「教官…感極まったからって少し長過ぎじゃないですか？」

「そ、そうだね。ごめん、シャーロック。」

「シャーロ…いいな…。」

「先生、とても暖かったです…。」

「そう…ですか…。」

「エリーも体験してみたら？」

「えっ！？わ、私はいいです…！！」

「そう？じゃあボクが体験しようと。」

「うわっ！？」

ネロが急に僕の胸に飛び込んできた。

「あ…本当だ。結構暖かい…。」

「そ、そうなの？そ、それじゃあ教官、私も失礼します！！」

「ええ！？」

コーデリアも飛び込んできた。

女の子とはいえ、人間二人を僕の体で支えられるはずもなく、僕は屍餅について倒れてしまった。

「み、みんなが行くなら…小林さん…私も…失礼します…！！」

「ええっ！？」

エルキュールも飛び込んできた。

ちょっと…苦しくなってきたかな…。

それに…みんな僕の上に乗ってて…かなり恥ずかしいんだけど…。

「皆さん楽しそうですね！！私も混ぜて下さい！！」

「ちょっと待ってシャーロック！！これ以上乗ったらさすがに潰れるから！！だからちょっと待って…。」

…こうして、僕達にとって久しぶりの怪盗事件は幕を閉じた。

あの後、あの状況でG4が戻ってきたときの冷たい視線は一生忘れられないだろう…。

第7話 復活 怪盗帝国！？（後書き）

いかがでしたか。

本当は最後はああなる予定は無かったんですが…。

ネロ「じゃあなんであなっ たんだよ？」

…どうしてだろうね？

コーデリア「成り行きでああなっ たんじゃないんですか？」

そんな感じかな。

さて…次回から何を書こうかな…。

ネロ「この前コメントで“これで話を書いて”ってあったから、それやればよくない？」

…うん、そうだね。

これを機会に何かいい話を書けそうなものを漁ってみるよ。

コーデリア「頑張ってくださいね。」

それではまた次回。

第8話 ハロウィンパーティー 前編（前書き）

久しぶりの投稿です。

ネロ「もう少し更新早く出来ないの？」

学校終わって帰ってきてから書くつもりでも、すぐに眠くなっちゃうんだよ…。

ネロ「ふん…。」

と、とりあえず今回の話の説明を…。

今回はWSの「ネコミミネロ」を見て、僕が考えた話です。

ネロ「作者の妄想物語だね。」

そんなこと言わないの。

第8話 ハロウィンパーティー 前編

怪盗事件から一週間…

僕達は怪盗からアダムの碧玉を守ったということで、その功績が称えられた。

まだトイズは戻っていないのでみんなの退学は取り消されてはいないけど、ミルキィホームズはしっかりと成長してると思う。

やっぱり…彼女達には探偵の素質がある。

だから僕も彼女達を探偵にするために頑張らないとね。

「ハロウィンパーティー？」

「はい！今年もやるんですよー！！」

シャーロックはそう言っているけど、僕はそんな行事があることを知らない。

「教官は知らなくて当然ですよ。去年から始まったイベントですし。」

「へえー…僕がいない間に色んな事をしているんだね。」

「しかもこのハロウィンパーティー前夜祭もかなり豪華で、出店を出していたりするんだよ。」

「出店って…そういうものって夏にやるものじゃないのかい？今は10月なんだけど…」

「別にいいと思うよ？美味しいものもたくさん出るし。」

「ネロ…もう少し…控えたら…？」

「何言ってるの、エリー？今は食べ盛りなんだからまだまだ食べるよ。」

「もう…、ネロは少しでも手伝おうって思わないの？」

「ぜんぜん。ボクはコーディネートみたいにお祭り事に積極的じゃないからね。」

まあ…ネロらしい反応だよな。

「でもネロ。あの話はどうするんですか？」

「そんなの断わるに決まってるでしょ。」

「何だい？あの話って？」

「何か前夜祭を盛り上げるためにボクに何かやって欲しいんだって。」

「へえ…、凄いいじゃないか、推薦されるなんて！！」

「でもさ…、さっきも言ったけどボクあまりこういうことに積極的じゃないんだよね…。しかも人前で何かするだなんて…ボクには合わないよ。」

ネロは本当にやる気はないようだ。

せつかくの%「そう…。まあ、小林が楽しみにしてくれてくれるなら、やらないことも無いよ。」

「えっ！？本当に！？」

「何でこんな時に嘘つかなきゃいけないんだよ？」

「ネロもやつとやる気になってくれたのね！！」

ネロが自分からやると言ってくれるなんて…。

僕は心の中で少し感動していた。

「それで、一体ボクは何をすればいいわけ？」

「それなら大丈夫です！！あらかじめクラス委員の人に何をするのか決めてもらいました！！」

「へえ…それで、何をやるんだい？」

「えっと…確かダンスでした！！」

「ダンスか…確かにそれが妥当だよね。」

「でもただやるだけじゃつまんなくない？やるなら面白いほうがいいんだけど。」

「それなら大丈夫です！ネロにはコスプレしてもらいますから！！」

「コ、コスプレ！？」

その言葉を聞いて驚いた。

普通じゃつまんないからってまさかコスプレをさせるとは…。

「教官！！私はその案に反対です！！少し度が過ぎていると思います！エリーもそう思うわよね！？」

「えっ…！？あ、えっと…。」

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ、エリー、コーディア。」

「ネロ…」

「どうせ、みんなでやるんだから。」

…え？

「ネロ…もしかして私達もやるの？」

「当たり前でしょ？ボク達はチームなんだから。」

「ええ！？てつきりネロ一人でやると思っていました！！」

「ひどいな、シャロ。ボクだけでこんなことするはずないじゃん。」

「そんな…人前で…恥ずかしい…！」

「エリーもこんな調子だし、やっぱりネロ一人で…」

「ボク一人ならやらないよ。」

「うつ…」

「いいじゃないですか！エリーさんもコーディアさんもやりましょ
うよー！！」

シャーロックは凄いやる気だな。

完全にネロよりやる気がありそうだよ。

「でも…コスプレはちょっと…。」

「恥ずかしい…そんなの…。」

「ネロ、エルキュールとコーデリアはやりたくないみたいだから、やる気のあるシャーロックと一緒にいいんじゃないか…。」

「えー！？やるならみんなで一緒にやりましょうよー！！」

「ボク達がやるなら二人にもやってもらうからね。」

「…だ、そうだけど…二人ともどうする？」

「…わ、わかったわ…やるわよ…。」

「…コーデリア…さん…！？」
「渋々コーデリアは承諾した。」

エルキュールは…どうかな？

「後はエリーだけだけど…どうする？」

「え…えつと…みんながやるなら…」

「やったー！！頑張りましょうね、エリーさん！！」

「う、うん…」

「…エルキュール。嫌なら嫌って言えばいいんだよ？」

「…嫌じゃ…ないんです…。確かに…恥ずかしいですけど…みんな
で思い出が作れるなら…」

「そっか…。なら、僕はもう止めないよ。頑張つてね、応援してる
から。」

「え？先生も一緒にやるんじゃないんですか？」

「はい！？」

何を言ってるの！？シャーロック！！

「いや、さすがに小林はやらないよ。小林のコスプレ見ても誰も得しないからね。」

うん…そうだよな。

そんなことしたら確実に僕の尊厳が失われるからね。

「でもコスプレって…何をすればいいのかしら…。」

「無難にメイド服とか？」

「メイド服じゃ踊りにくいと思います。踊りやすい服ってことでチアガールなんてどうでしょう？」

「うーん…ネロとエリーはどういうものがいい？」

「え、えっと…恥ずかしく…ないもので…。」

「ボクは別に何でもいいんだよね…。小林は何かない？ボク達に着てほしい服とか。」

僕に話が振られてきたけど、正直何を言っているのか…。

でもせつかくの彼女達の舞台なんだから失敗はさせたくない。

うーん…。

「動物…なんてどうかな？ほら、ネロは動物が好きなんですよ？」

「動物、か…。確かに動きやすいし、可愛いし良いかもね。」

「それじゃあ、動物さんに決定…!!」

何か僕の案が採用されてしまったようだ。

…みんなの動物のコスプレ姿、か…。

……………

「教官!!何顔を赤くしているんですか!!」

「え!?!あ、えっと…」

「一体何を想像しているのかな？小林は？」

「えっと…みんなの動物姿を考えてみて…結構可愛かったから…。」

「可愛いだなんて……!! そんな……小林さん……。」

エルキュールと他のみんなは顔赤くしていた。

言った僕も恥ずかしいんだけど……。

「と、とりあえず衣装を探しに行かない? ボク達昼から授業無いし。」

「そ、そうなんだ。それじゃみんな、行こうか。」

少し変な空気になっていた僕達はネロの一言により衣装を探しに行った……。

「わぁー……色んな服がいっぱいです……!! ネロはどついつのを着ますか?。」

「うーん……なかなか良いのが無いな……。」

「この服……布……小さい……!!。」

「だ、駄目よエリー……!! こういうものを着るのはもう少し大人にな

ってからよ!!」

衣装を買ったために僕達はヨコハマデパートに来ていたが…

何か…居づらい…。

僕はみんなに気付かれないように静かにみんなから離れた。

「なに？コーデリアこれ着て小林を誘惑するの？」

「な、何を言ってるの！？するわけないでしょ！！そんな破廉恥なこと…。」

「そう？じゃあボクがやるっかな？」

「ネロ…そんなの…駄目…!!」

「皆さん何をするつもり何ですか？」

「シ、シャロにはまだ早いわよ!!」

「シャロももう少ししたらわかるようになるかもね。」

「一体何なんですか、エリーさん？」

「え！？えつと…！！」

そんな会話があったことを僕は知らない。

「みんな、着たいものは決まったかい？」

「はい！決まりました！！」

「今から試着してくるからちょっと待ってて。」

「うん、わかったよ。」

「あ、あの…！本当に…これ…着るんですか…？」

「エリー…私達はもうここまで来てしまったの…。覚悟を決めなさい…。」

「そんなに深く考えなくてもいいと思うけど…。」

「皆さん、着替えは終わりましたか？それじゃあ行きましょう！！」

「ああみんな、着替えは終わっ…た？」

試着室から出てきたみんなを見て僕は言葉を失った。

だって…みんなネコミミ姿で出てきたんだから。

「どうですか先生！！似合っていますか？」

「ああ、うん。凄く似合っているよ。」

「本当ですか！？ありがとうございます！！」

「エリー…もう少し私の後ろから出てきたら？」

「だって…こんな姿…小林さんに見られたら…恥ずかしい…」

「そ、そんなこと言って…！！私だって恥ずかしいのに…」

「だ、大丈夫だよ。二人ともとても似合ってるよ。」

「あ…ありがとうございます…小林さん…」

「ふう…。」

「何、もう疲れたの？小林。」

「一人一人の感想を言うなんてしたこと無かったからね…。」

慣れないことはやるものじゃないね、うん。

「ふーん…じゃあさ、ボクの衣装の感想も言ってよ、小林。」

「えっ！？えつと…。」

さつきからみんなの衣装の感想を考えて疲れているけど…ネ口だけ何も言わないわけにもいかない。

ちゃんと考えないと…。

「うーん…。」

「…そんなに無理に考えなくても大丈夫だよ。」

「でも、だからってネ口だけを仲間外れみたいなことにするなんて…。」

「小林、さつきから一人一人ちゃんと感想を言っていてって疲れてるんでしょ？だったら無理に考えろだなんて言わないよ。」

「…わかった。ごめんね、ネ口。」

「気にしないでよ。ボクも無理に言わせたりしないからさ。…お疲れ様、小林。」

「…ああ。ありがとう、ネロ。」

みんなの衣装を見ていて気になるところが一つある。

「何か…みんな露出が高過ぎないかい？」

「き、教官！！どこ見ているんですか！？」

「ごめん！！でも祭りだからってこれは少しやり過ぎなんじゃ…。」

ネコミミに加えてミニスカート、さらに上の露出度も高めて…、教育上大丈夫かな？

「先生…、ここまで来たなら私達はやりますよ。」

「が…頑張る…!!」

「そ、そう？まあそこまでやる気なら止めないけど…」

「大丈夫、心配しないでよ小林。ボク達だって子供じゃ無いんだし、こんな格好へっちゃらだよ。」

「…わかった。僕は応援しているから、精一杯楽しんでおいで!!」

「『はい!!』『』『』」

みんながこの状態なら、僕は何もしなくても大丈夫だろう。

みんなが楽しめることを願って、僕達はここを後にした。

「…ねえみんな。もう前夜祭まであと少ししかないけど…、やることはもう考えてあるの?」

衣装を買って少し経って、ハロウィンパーティー（の前夜祭）まで一週間を切った。

みんながしようとしていることを僕は全く耳にしないんだけど…。

「小林…、ボク達はそんなに無計画じゃないから。ちゃんと考えて練習もしてきたよ。」

「え、そうだったの!？」

「そうですよ!!先生は見えていないかもしれませんが、授業が終わったら毎日ちゃんと練習していたんですよ!!」

「へえ…ちゃんと練習しているなら大丈夫だね。」

練習のことに関しても、もう心配しなくてもよさそうだ。

「そうだ!!教官、よろしければ私達の練習の成果を見ていってくれませんか？」

「それは別に構わないよ。」

僕はミルキイのみんなの練習の成果を見るべく、体育館へ向かった。

「凄い…凄いよ！！この短期間でここまで凄いものが出来るなんて！！」

みんなのダンスを見て、僕は感動していた。

みんなが…こんなに光って見えるなんて…！！

「そ、そんなに褒めないで下さいよ…。」

「だってみんな凄いよ！！これなら前夜祭も成功間違い無しだよ！！」

「そ、そうでしょうか…？でも、教官が言っならそんな気がします。」

「本番も…今日みたいに…頑張ろう…。」

今日の僕に対しての発表によってみんなもかなり自信が付いたようだ。

「結構頑張ったでしょ？ボク達。」

「ああ。それにネロがこんなに頑張っているのを見るのは久しぶりな気がしたよ。」

「ひどいな。ボクだって事件を調べるときくらいは真面目にやってるよ。」

「ははっ…ごめんごめん。」

「それに、小林は今回ボクがこのためにどれだけ頑張ったか知らないでしょ？」

「まあ…知ったのが今日だったからね。」

「確かに最初は面倒だったけど、やり始めたら意外に楽しくてさ。最後は見ている人を楽しませるダンスをしたい、って思ったよ。」

「へえ…そうだったんだ。」

ネロがこんなことを言うなんて…本当に成長したな。

「それと…他にも目的があるんだけどね。」

「他の目的？なんだい、それは？」

「それは…」

「それは？」

「秘密だよ。」

「な、なんだよ！！それ。」

「ボクだって女の子なんだから秘密の一つや二つもっていてもおかしくないでしょ？」

「そうだけど…」

「じゃあいいじゃん。さて、それじゃあみんな本番前の最終調整しよっか。小林も見てってよね。」

「うん、わかったよ。」

「それじゃ皆さん！！いきますよー！！」

その後の最終調整を、僕は最後まで見守っていた。

もうすぐ本番か…楽しみだな。

本番当日……

「ど、ドキドキしますね……エリーさん……。」

「う、うん…。緊張…してきた…。」

「大丈夫だよ、肩の力を抜いて。」

「わ、わかりました。肩の力を抜いて、深呼吸します…！すーはー、すーはー。」

「すー…はー、すー…はー。」

「シャロもエリーも、そんなに何回もしなくても…。」

「それだけ緊張していたんでしょ？」

「そうかもしれないね…。そういうネロとコーデリアは緊張していないの？」

「まあ…全く緊張していないわけではありませんが…。」

「あんなに必死に深呼吸するくらいまでは緊張してないよ。」

「そう…なら、大丈夫かな。」

開始10分前…

発表まであと僅かになった。

シャーロックとエルキュールは必死に深呼吸をしていて、コーデリアは脳内でトレーニングをしていて、ネロはいつも通りでお菓子を

食べていた。

「みんな…もうすぐ本番だけど、練習してきた時間と、一緒に頑張ったみんなを信じて。悔いの残らないように、全力でいくんだ!!」

「……はい!!」「……」

そう言ってみんなはステージの上へと足を踏み入れた。

後は、僕も彼女達を信じるだけだ。

「頑張っ…みんな…」

「え、えっと、みなちゃん!!今日から始まるおまちゆりの…」

「（ちょっとシャロ…!!噛みすぎよ…。」

「（す、すみません!!）」

「（…シャロ、マイク貸して。ボクが代わりに言うから。）…えっと、みんな。今日から二日にかけてパーティーが始まります。今からボク達ミルキィホームズがやるのは、まあ余興みたいなものかな

？結構練習したから、期待して見てってよ。それじゃ、始めるよ！
！みんな！！」

「「「はい！！」「」「」

ネロの掛け声を合図にみんなの演技が始まった。

『あいさつしてよね

Happy Road

雨上がりの窓キラリ

前向いて 横向いて

始まるのは次のミライ』

彼女達の演技は終わり、会場は大歓声ち包まれた。

「はふ…疲れました…。」

「お疲れ様、みんな。」

僕は戻ってきたみんなに声をかけた。

「凄く…恥ずかしかった…。」

「ええ…。でも、少し楽しかったかも…。」

「まあこんなもんだよね。」

「ははっ…。じゃあみんなとりあえず着替えてきたら？いつまでもその格好だと寒いだろう？」

「ボクは別にこのままでもいいけど…。」

「だ、駄目よ！！ネロ。早く着替えに行きましょう！！」

「はい…。」

ネロはコーデリアに連れていかれて、シャーロックもエルキュールも二人に付いていった。

今の時刻は午後5時半…。

結構遅くなったな…。

「お待たせ〜小林。」

僕の前にいたのはネロ一人だけだった。

「あれ…？他のみんなは？」

「シャロが色々な店に足を踏み入れちゃうから先に行ってるって。」

「そうなんだ…。あと、何で浴衣なんだい？」

何故かネロは浴衣姿。

今は夏じゃないと思うけど…。

「ああ、そういうえば小林は知らないんだっただね。一日目のお祭りは夏祭りみたいな感じになってるんだよ。」

「へえ〜そうなんだ。」

前もって調べておけば良かったかな。

「それじゃ、シャーロック達を探しに行こっか。」

「うん、そうだね。」

僕はネロと二人でシャーロック達を探しに歩き始めた。

「…ねえ、小林。」

「なんだい？」

「ボク…今回の出し物をやるのはもう一つ理由があるって言ったよね？」

「ああ…そういえばそんなこと言っていたね。」

その理由は教えてもらえなかったけどね。

「その理由つてのはさ…、小林に見せたかったんだよ。」

「僕に？」

「うん。成長したボク達の姿とか…それと、いつもと違うボクとかをね。」

なんというか…意外だった。

ネロがそんなことを考えていたなんて…。

「今日のボク達…どうだった？」

「みんなとっても輝いて見えた。それと…とても可愛かったよ。」

「…ありがと、小林。」

ネロは少し照れた仕草をみせた。

「みんなのところにっこうよ。早くしないと待ちくたびれちゃうよ。」

「…そうだね。それじゃ急ごうか。」

こんな感じで、僕達のパーティーが始まった。

たくさん思い出をつくっていこう。

みんなであっ。

第8話 ハロウィンパーティー 前編（後書き）

ネロ「作者の妄想爆発だったね。」

だって書きたかったんだもん…。

今回のコスプレしたみんなの姿ですが、ネコミミネロの衣装をみんなの色（シャロ↓ピンク エリー↓緑 コーデリア↓青）に変えた感じです。

あと、みんなが発表した『雨上がりのミライ』ですが、最後の部分しか書いていませんがちゃんと全てやっていますよ。

ダンスですが、『雨上がりのミライ』のPVを見てみてください。

DVDの一巻を買うか、動画投稿サイトを探してみてください。

ネロ「説明長いよ…。」

ごめんなさい…。

ハロウィンパーティーは全3部話書く予定です。

ネロ「次回の中編もお楽しみに!!」

第9話 ハロウィンパーティー 中編（前書き）

今回は、「浴衣のシャロ」「浴衣のネロ」「浴衣のエリー」のカードで考えた物語です。

コーデリア「私の浴衣のカードは無いんですか？」

…無いっぽいそうですよ。

コーデリア「そんな…どうして!？」

…さあ？

コーデリア「さあ、って…。」

コーデリアが話すと長くなりそうなので、さっさと物語に進めますか。

コーデリア「ねえ!!ちょっと待つ…。」

シャロの一人称が“私”ではなく“あたし”だったので、この回から変更させていただきます。

第9話 ハロウィンパーティー 中編

「先生、遅いですよ!!」

「ごめん、少し道に迷っちゃって...」

ハロウィンパーティーの前夜祭が始まり、僕は彼女達と一緒に露店を見て回ることになった。

「ネロ!!待ち合わせ場所は伝えてあったでしょ!!?どうしてこんなに遅くなったの!?!」

「いや、回りに美味しそうなものがたくさんあったからさ。」

「それで...小林さんも一緒に...?」

「うん...僕一人だとみんなの場所が分からなかったからね。」

それに前夜祭だしとても人が多いから、ネロに付いていくしか出来なかった。

その為、僕の財布は大打撃を受けてしまったけど...まあ大丈夫だろう。

「それより全員揃ったなら早く出発しましょう!!あたし見たいお店がたくさんあったんですよ!!」

「うん、それじゃみんな行こうか。」

「ねえ、見て下さい先生！！あのお人形とっても可愛いと思いませんか？」

「うん、とても可愛いと思うよ。」

「そうですね！！あ、あっちのお店も面白そう！！」

「シャロ…そんな急がなくてもいいんじゃない？店は逃げないんだしさ。」

「だって、面白そうなお店がたくさんあるんだもん！！落ち着いてられないよ！！」

シャーロックはとても楽しんでいる様子だ。

そう言っている僕も、色々な物が置いてある店をたくさん目にして、楽しみでしうがなかった。

「ちょっと…シャロ、ネロ、待ちなさい！！もう…教官、エリー、追いましょー！！」

「う、うん…。」

「はは…、元気な子達だな…。」

さて…二人を見失わないように早く追おう。

「へえ…思った以上に色々な店があるんだな…。」

シャーロックとネロを追っている途中、僕はたくさんの露店に目を奪われていた。

「射的にヨーヨー釣り…あ、金魚すくいまであるんだ。」

「教官、どうしました？」

「あ、いや…たくさん露店があるな、と思ってね。」

結構僕も楽しみにしてたんだな…

っと、いけないいけない。今は二人を追っている途中だったっけ。

「……………」

「…？どうしたの、エルキュール？」

「え！？えつと…何でも…ありません…。」

エルキュールが目を奪われていたもの、それは一軒の露店…金魚すくいだった。

エルキュールもこういうことに興味を持ったりするんだな…。

「何でも…無いです。小林さん…行きましょう…。」

「…シャーロックとネロを追いかけた後に、一緒にやってみる？」

「え…！？いいんですか…小林さん…？」

「うん、勿論だよ。それじゃあ早く二人を追いかけてようか。」

「…はい…！」

僕の誘いにエルキュールはとても嬉しそうに答えてくれた。

エルキュールの為にも、早く二人を追いかけないとね。

「シャロ！！ネロ！！ちょっと待ちなさい！！」

「コ、コーディネアさん！？どうしたんですか！？」

追いかけて10分後、ようやくシャーロックとネロを捕まえた。

「二人とも…せっかくみんなで来たんだし、みんなで回ったほうが楽しいんじゃないかな？」

「まあ…確かにそうだね。」

「ご、ごめんなさい、皆さん！！あたし達少しはしゃぎすぎちゃって…。」

「そんなに楽しみだったのかい？」

「はい！！…昔、あたし達みんなで遊園地に行く約束をしたじゃないですか。」

「ああ…でも、みんなの予定が合わなくて、結局一人一人別の日に行ったわけ。」

三年前、怪盗帝国を倒した後僕はご褒美としてみんなで遊園地に行くことになった。

でもみんなの予定が合わなくて、一人一人別の日に遊びに行くことになってしまった。

「あたし…とても楽しみにしてたんですよ？みんなと一緒に楽しい思い出が作れるって…。でも…行けなかった…。」

「……………」

「だからあたし、今日も凄く楽しみだったんです。だから少しはしやぎ過ぎちゃって…。」

「…そっか。」

シャーロックは、ただみんなと一緒に思い出を作りたかったただけなんだ…。

だから、気持ち空回りしてあんなにはしゃいじゃったんだね。

「なら、思いっきり楽しんだほうがいい。」

「えっ…？」

「せっかくのパーティーなんだ。楽しまないと損だろう？」

「確かに、遊ぶんだったら精一杯遊んだほうがいいよね。」

「…はい…！分かりました…！それじゃあ皆さん、次は何処に行きますか？」

シャーロックは少し落ち込んだけど、元気になって良かったよ。

次に行きたい場所、か…。

「…ちよつと行きたい場所があるんだけど…良いかな？」

「はい！勿論ですよ！！皆さんもそれで良いですか？」

「ボクはそれでいいよ。」

「まあ…教官が行きたい場所であれば…。」

「ありがとね、みんな。それじゃあエルキュール、案内しようか。」

「は…はい。」

「あれ、何でエリーは小林が行きたい場所を知ってるの？」

「そ、それは…。」

「もしかして…エリーが誘ったの？」

「え…！？」

「エリー…、なかなか大胆なことをしたわね…。」

「ち…違っ…！！」

「え、違うの？それじゃあ小林が誘ったとか？」

「えっと…まあ、そういうことになるのかな。」

実際に僕がエルキユールを誘ったってことになるんだけど…、改めて言われると少し恥ずかしいな…。

「それじゃあ…二人のデートを邪魔しちゃったね。」

「デ、デート!?!」

「そ…そういうことじゃ…!?!」

デートって…!!

「ち、違っんだよネロ!! 僕はただエルキユールが楽しそうに見ているから誘っただけで…。」

「そんなに焦らなくても、冗談だよ。ジョーダン。」

「え…? 冗談…?」

「うん。エリーと小林に限って二人だけで勝手に行っちゃうなんてことは無いでしょ?」

「そ、そう…。」

駄目だ…。

やっぱりこの子にはかなわない…。

「皆さん何してるんですかー！！早く行きましょー！！」

「それじゃ案内してよ、二人とも。」

「うん、それじゃ行こう。」

僕はさっきあった金魚すくいの露店へ向かった…。

「うー、なかなか捕れないです…。」

「落ち着いて、シャロー！！金魚の姿をしっかりと目で追えば…。」

「そういうけどコーデリア、まだ一匹も捕れてないよね。」

「そ、それならネロだって一匹も捕まえてないじゃない!!」

「僕はコーデリアなんかよりもずっと長く動物と暮らして来たんだよ? だからこんな余裕だよ。」

「い、言ったわね…。それなら、どっちがたくさん捕まえられるか…勝負よ、ネロ!!」

「別にいいけど…負けても泣かないですよ? コーデリア。」

「な…なんですって!!」

「落ち着いて下さい、コーデリアさん!!」

な…何か向こうは凄く楽しそうなことになってるな…。

こっちはエルキュールが金魚すくいを頑張っている。

とてもやりたそうにしていたし、とても楽しそうだ。

「あ…また、逃げられちゃった…」

でも、やっぱり難しいのか、エルキュールは未だに一匹も捕れずにいた。

「あと…もう少し…」

「大丈夫だよ、エルキュール。落ち着いてやれば必ず捕まえられるよ。だから、頑張つて!!」

「は…はい!!」

こうして、少しの間エルキュールは金魚と格闘し続けた…。

「くっ……!!…!!どうして…、どうして勝てないの!!?」

「だから言つたでしょ…?ボクには勝てないって…。」

「ま…まだよ…!!…まだここにこの子達がいるかぎり、私は戦い続けるわ!!」

「…いいよ。なら、ボクはそれを返り討ちにしてあげるよ!!」

「勝負よ、ネロ!!」

「望むところだ、コーデリア!!」

「あ……！！捕まえた……！！」

「凄いいじゃないか！！エルキュール！！」

長い格闘の末……遂にエルキュールは金魚を一匹捕まえることが出来た。

「や……やった……！！嬉しい……！！」

「良かったね、エルキュール。」

「はい……！！」

捕れたことが嬉しかったのか、エルキュールは少し涙を浮かべていた。

「おめでとう、お嬢ちゃん。それは持って帰っても大丈夫だよ。」

金魚すくいの露店の人がそう言った。

多分エルキュールが頑張っていたところをずっと見ていたんだろう。

「えっ…？いいんですか…？」

「ああ、君はずっと頑張っていたからね。それは記念だよ。」

「あ…ありがとうございます…！！」

こうしてエルキュールは捕まえた金魚を持って帰ることになった。

「小林さん…。」

「なんだい？」

「この子…私達の事務所で飼っても…いいですか…？」

「え、僕達の事務所で？」

事務所でペットは大丈夫だったわけ？

「駄目…ですか？」

「…いや、いいよ。僕達の事務所で飼おう。」

「本当ですか…！？」

「ああ。」

まあ金魚なら大丈夫だろう。

それに…エルキュールがあんなに嬉しそうにしているし、嫌だなんて言えないよ。

「ありがとうございます…!!小林さん…!!」

「気になくていいよ。それよりみんなのところに帰ろうか。」

「まだやるの?コーデリア。」

「も…もちろんよ!!私は何回でもあなたに挑戦し続けるわ!!」

「全く…何回やってもボクには勝てないって…。」

「ねえネロ…まだやるの?」

「え、そのつもりだけど。」

「なんかだんだん金魚さんの数が少なくなってる気がするよ…。」

「だってさつきからずっとやってるしね。」

「だからもう止めようっ。」

「それもそうだね…。もうすぐ小林達も終わるころだろうしね。」

「シャーロックー！！ネローー！！コーデリアー！！次の場所に行くよー。」

「「「はい。」」」

このとき、ネロとコーデリアがこの露店の最大捕獲数を更新したとかしないとか…。

「やっぱりみんなで回るお祭りは楽しいですね、先生！！」

「うん、そうだね。…シャーロックは本当にこのお祭りを楽しみにしていたんだね。」

「はい！！なんとって初めてみんなで遊んでいられるんですから！！あ、あんなところに面白そうなお店があります！！皆さん、行きましょう！！」

「ま…待つて…！！」

「ちょっと待ちなさい、シャーロ！！」

シャーロックは近くにあった面白そうなお店に走って行って、エルキュールとコーデリアはシャーロックを追いかけて行ってしまった。

「…本当に元気だな、シャーロックは…。」

「シャーロはボク達の中でも一番今日を楽しみにしていたからね。あんなに嬉しそうなのもわかるよ。」

「“ボク達”ってことは、他のみんなも楽しみにしてくれていたの？」

「そりゃあ、ね。初めてみんなで遊べるんだから、楽しみじゃないって言うことが無理だよ。」

「そっか…それは嬉しいな。」

「やっぱりさ、5人していると楽しさも5倍って思わない？」

「うん。僕も一人でいるときより楽しいよ。」

「そう、小林も楽しんでいてくれてよかった。」

「さあ、早くしないとまた置いていかれるよ、急ぐうん!」

「うん!」

「わあ… 凄い綺麗です…!!」

今、僕達は探偵学園の近くにある高い丘の上にいる。

ミルキイのみんなが僕に見せたいものがあるって言うんだけど…。

「前に来たときより、やっぱり景色が違うね。」

「とつても…綺麗…。」

「君達が見せたかったものって、もしかしてこの夜景のことかい？」

この丘の上から眺めるヨコハマの夜景は、素晴らしい眺めだ。

「違いますよ、教官。確かにこの景色も綺麗ですけど、私達が見せたかったのはこれじゃありません。」

「じゃあ一体何を…」

僕がそう言おうとしたとき、

ヒュー…

ドカーン！！

「うわっ！？」

空に一輪の花火が打ち上がった。

「上がりました！！」

「君達が見せたかったものって。」

「そう、この花火だよ。ここなら下よりも綺麗に見えるでしょ？」

「ああ…。ヨコハマの夜景と花火が合っていて、とても綺麗だよ…。それにしても良くこんな場所を見つけれられたね。」

「みんなで…たくさん探していましたから…。」

「教官と一緒にたくさん思い出を作りたかったから…。だから私達、この景色を見せたかったんです。」

みんな、そこまで今日を楽しみにしていたんだ…。

「…ありがとう、みんな。僕…みんなと一緒にいれて、本当に幸せだよ。」

「先生…。」

僕は自分でも分かるくらいに、かなりの涙声だった。

多分泣いてたんじゃないかな…うわっ、ちょっと恥ずかしい…。

「さあ先生！！そろそろ行きましょう！！あたし、まだ回りたいお店がいっぱいあるんですよ！！」

「わかった、わかったからそんなに引つ張らないでよシャーロック……。」

「これからまだまだ回るんだからさ。頑張つてよね、小林。」

「あつ！！待ちなさい！！」

「みんな…待つて…！！」

こうして…

この後いろいろ振り回されたけれど、僕達は今日を精一杯楽しんだ…。

第9話 ハロウィンパーティー 中編（後書き）

次の回で、ハロウィンパーティーも終了です。

シャロ「思ったより短かったです…。」

確かにそうだけど…、まだ時間はあるんだからたくさん小林との思い出を作っておいたほうがいいよ。

シャロ「…そうですね！！あたし、頑張ります！！」

つと、言うことで次回ハロウィンパーティー後編。

シャロ「お楽しみに！！」

第10話 ハロウィンパーティー 後編（前書き）

お久しぶりです、Lowellです。

テストがあつたり、なろうに入れなかったりと色々忙しくて更新が遅れましたがやっと更新できました。

ネロ「全く…作者がサボるから。」

テストも終わったし、クラスの席替えで窓側の一番後ろになったし、更新速度を上げようと頑張ってみようと思います!!

コーデリア「授業を受けないんですか！？そんな風だからテストで（ピー）点なんてとってしまうんですよ!!」

ぐはっ…!!

第10話 ハロウィンパーティー 後編

翌日…

昨日の前夜祭とは違って物静かな雰囲気ではロウィンパーティーは開催された。

探偵学院の生徒達はみんなそれぞれ違う仮装をしており、いかにもハロウィンらしい感じた。

生徒達もみんな楽しんでる。楽しんでるけど…

…昨日と比べて季節感の統一性が無いよね、このイベント。

「トリックオアトリート！！です、先生。」

「うわっ！？シャーロックか、びっくりした…。」

「今日はハロウィンパーティーですからね。と、言うわけで先生、お菓子くださいー!」

「わかった、えつと…どこにしまったっけ…、あったあった、はいどうぞ。」

「わーい!先生、ありがとうございます!」

そう言つてシャーロックはまた違う人にもお菓子をもらいに行つた。今日はハロウィンパーティーということで、僕はお菓子を持ち歩いている。

なぜならお菓子を渡さないといたずらをされてしまうからだ。

いたずらされるのはちよつと…ね。

「小林くお菓子頂戴。くれないと…イタズラするよ?」

「はいはい…どうぞ。」

「さすが小林く!じゃあ貰つてくよ。」

ネロはみんなの中でも特にお菓子が好きだからね…。

渡さなかったら何かひどいイタズラがありそうだな…。

「あゝおいしかった。ねえ小林、もうお菓子ない？」

「あるといえばあるけど…ネロ、少し食べるの早すぎない？」

「だっておいしかったんだもん!!」

「全く…仕方ないな、はい。」

「ありがとね〜小林!!」

「や、やられた…。」

まさかお菓子を全て持っていかれるとは…。

相変わらずネロには敵わないな…。

さて、どうする…。このままだとこの後来る子にお菓子を渡せないぞ…。

「こ、小林さん…。」

「や、やあエルキュール。どうしたんだい？」

「今日はハロウィンパーティーなので…小林さんにお菓子を貰おうと…。」

…やっぱり？

持っていたお菓子は全部ネロに渡しちゃったし…どうしよう。

「小林さん…、どうかしたんですか…？」

「えっと…実はさっきネロに会って僕が持っていたお菓子を全部持ってかれちゃったんだよね…。」

「そ、そうなんですか…？」

「うん。だから今はエルキュールにあげられるお菓子が一つも無いんだ…ごめんね。」

「いえ…お菓子のことはいいんです。ただ…」

「ただ？」

「お…お菓子を貰えなかったら…い、イタズラをしないとイケないんですよね…。」

「ああ…そういえばそうだったね。」

「だから…私が…小林さんに…イタズラを…。」

エルキュールは顔を赤くしてうつむいてしまった。

エルキュールは優しい子だからイタズラをしづらいということはあるけど…、顔を赤くする理由は何なんだろう、見当もつかない。

「やりづらいたったら無理してやる必要はないんじゃないかな？」

「…いえ、たまには勇気を出して…頑張ってみようと思います…。」

うん、その勇気は僕へのイタズラじゃなくて他のことに使って欲しかったね。

「これから少し考えてみます…覚悟しておいてくださいね、小林さん…。」

そう言つてエルキュールは去っていった。

エルキュールがイタズラか…、少し興味はあるな。

受けるのは僕だけだね。

「さて…早く新しいお菓子を買ってこないと。」

また違う子が来たときにお菓子を渡せるようにしておかないとね。

「教官、こんばんは。」

「コ、コーディネリア!？」

ま、まずい…。まだお菓子を買ってきてないのに…。

ここはもう正直に言うしか…。

「ごめん、コーディネリア。実は僕お菓子を持って…。」

「大丈夫ですよ。私、今年はお菓子を渡す側なので。」

「あ、そうなんだ。」

「私も二十歳ですからいつまでもお菓子を貰っていただけませんよ。それと、さっきエリーに聞いたんですけど、お菓子を渡せなかった

そうですね。」

「うん…ネロに会ったときに持っていたお菓子を全部持ってかれちゃって…。」

「もう…ネロったらまた教官を困らせて!!」

「いや、僕は全然気にしてないから。それより、エルキュールが僕にイタズラをしようとしていたのは驚いたな。」

「エリーがですか!?あの子がそんなに積極的なことをするなんて…。」

「うん、僕もびっくりしたよ。イタズラを受けるのは僕だけど、少し楽しみでもあるんだ。」

「確かにエリーがどんなイタズラを考えるのか興味はありますね。」

「だから心して待つてることにするよ。」

「そうですか、頑張ってください。…もうそろそろ時間かしら。」

「この後何かあるのかい?」

「はい、この後全校生徒が中庭に集まってパーティーをするんです。教官も行きますか?」

「そうだね。この後予定は無いし、参加させてもらおうよ。」

「それじゃあ中庭に向かいましょうか。」

僕とコーディネリアは中庭へ向かった。

中庭にはこれから始まるパーティーのためか、凄い人数の生徒が集まっていた。

「うわっ！！凄い人だな…。」

「このパーティーは今回のメインイベントですからね。」

「あ、いたいた。先生！！コーディネリアさん！！」

「やあ、シャーロック。ネロとエルキュールも一緒なんだね。」

「せっかくだしみんなで一緒に、てことでね。小林とコーディネリアも一緒にどう？」

「まあいいんじゃないかな。」

「そうですね。みんなで楽しみましょう！！」

「そつえばこのパーティーって何をするの？」

「先生は初めてでしたね。みんなここで晩御飯を食べるんです！
」

「今回の献立はカボチャが入ったカレーらしいよ。」

「へえ…カボチャが入ってるんだ。ハロウィンらしいね。」

「でも去年はひどかったよ。今年は凄いまともだね。」

「去年？何かあったのかい？」

「去年は…バーベキューでした…。」

「何だ、普通じゃないか。」

「バーベキューの具材の3/4がカボチャでした。」

「全然普通じゃなかった！！」

それなら今年がまともなものも願ける。

「それより早くカレーを貰いに行きましょうよ！！」

「そうだね。それじゃ、行こうか。」

「うわぁ〜美味しそうです!~!」

「こらシャロ!~!順番なんだから慌てないの!~!」

「小林さん…どうぞ…。」

「ありがとう、エルキュール。」

「エリー、ボクの方も取ってー!~!」

「うん…ちょっと待ってて…。」

全員自分のカレーを取って食べる席を探そうとしたんだけど…。

「席…見当たらないですね。」

「どうしましょう、先生?」

「うーん…。」

「あの…よろしければここの席を使いますか？」

「えっ？」

僕達に話し掛けてきたのは、仮面を付けた女性だった。

「よろしいんですか？」

「はい。その代わり、私も食事にご一緒させてくださいね。」

「ええ、構いませんよ。」

「早く座ろつよ。ボクもうお腹ペコペコだよ。」

「それじゃ食べようか。」

「いただきます!!」

シャーロックの合図とともに、みんなカレーを食べ始めた。

僕も食べようと思ったけど、それより気になることがあった。

「あの…、仮面は外さないんですか？」

「もちろん外しますよ。私もお腹が空いているので。」

そう言つて女性は仮面を外し…

「えっ?!」

仮面を外した女性は…この学院の生徒会長、アンリエットさんだつた。

「ど…どうして…?」

「仮面を付けたままじゃ、カレーが食べられないでしょ?」

「いや、そうじゃなくて。どうしてアンリエットさんがここに…?」

「学院の生徒が学院のイベントに参加している、おかしいところは何も無いはずですよ?」

「あ…。」

そつえばアンリエットさんもこの学院の生徒だ。

学院の中の権限が学院長より高いからあまり実感が湧かないね。

「私だって、たまには生徒達と一緒に笑ったり騒いだりしたいんですよ。」

「そうですね！！そうじゃあよろしくお願いします、アンリエットさん！！」

「こちらこそ、今日はよろしくお願いしますね、ミルキィホームズの皆さん、小林さん。」

「ええ、じゃあ食べましょうか。」

僕はカレーを口にする。

口にした瞬間、僕の口の中に広がる……辛さ。

「?!」

え、何?! 僕のカレーものすごく辛いんだけど!?

みんな普通に食べてるけど、僕のカレーがおかしいの? それとも探偵学院じゃこれが普通なの!?

僕は席を立ち上がる。

「どうしました、小林さん?」

「ア、アンリエットさん…。少し飲み物を貰いたいんですけど…」

「分かりました、案内しますよ。」

「お、お願いします…。」

僕はアンリエットに案内してもらって飲み物がある場所へ向かった。

の、喉が…。

「エリーさん、何ですかそれ？」

「タ…タバスコ…。」

「エリーって辛いもの好きだったかしら？」

「少し…苦手…。」

「じゃあ何でこんなところに…？」

「そ、それは…。」

「あれ？先生とアンリエットさんがいませんよ？」

「教官達ならさつき飲み物を貰いに行ったわよ。」

「エリー…もしかして…」

「い、イタズラしないと…いけなかったから…」

「確かに教官のカレーだけ少し色が赤いわね…」

「誰か食べてみる？小林が口付けた物だけ…」

「………」

「あ、あたし凄く興味があるので食べてみてもいいですか？」

「ボ、ボク結構お腹空いてるから食べたいな。」

「わ…私が入れたんだから…責任、とらないと…」

「みんなにこんな危険なもの食べさせられないわ！…こ、こは私
が味見をしてから…」

「………」

「こ、ここは公平にじゃんけんで決めませんか？」

「確かに…、それが一番早いね。」

「いいと…思う。」

「そうね。それじゃ…」

「「「「じゃーんけーん！」「」「」

「ふう…助かった…。」

あのカレーがあんなに辛かったなんて…。

水が無かったら危なかったな。

「大丈夫ですか、小林さん？」

「ええ。案内してくれてありがとうございます。」

「いえいえ、お役に立てて光栄です。」

「みんなの分も持っていたほうがいいかな…。」

「そうですね。あの子達も喉が乾いているところでしょ。」

「…あの、アンリエットさん。」

「はい、どうしました？」

僕はアンリエットさんにどうしても聞かなくてはならないことがあった。

「…あの子達は、大丈夫なんでしょうか？」

「あの子達とは…ミルキイホームズのことですか？」

「はい。前回の街道怪盗事件で宝石を守ったけど、結局あの子達にはトイズは戻らなかった。このままだと彼女達には一生トイズは戻らないと思います…。僕は彼女達を退学にはさせたくありませんけど、方法が全く思い付かないんです…。」

こんなこと、みんなの前では絶対に言えないけど…アンリエットさんになら言ってもいいと思った。

「…三年前、このヨコハマを救った探偵を覚えていますか？」

「それは、彼女達ミルキイホームズです。」

「そう、あなたが率いたミルキイホームズです。あなた達は一度、ヨコハマを救っているじゃありませんか。」

「それは、彼女達にトイズがあつたからで…。」

「確かに今の彼女達にはトイズがありません。それは、探偵にとつては致命的です。…けれど彼女達には他の探偵にはない、素晴らしいものを持っているじゃありませんか。」

「…チームワーク、ですか？」

「はい。探偵は個人で活動するのが一般的でしたが、彼女達はそれぞれを思いやり、一緒に行動しています。そのことが普通の探偵にはない…トイズではない新たな可能性だと、私は思っています。…小林さん、あなたはトイズが無くても探偵になった。あなたの存在がそのことを証明してくれています。自信を持ってください。」

「アンリエットさん…あなたの話を聞いて、少し自信がもてたような気がします。」

「頑張ってくださいね。それでこそ…私が憧れた人なのですから。」

「ははっ…ありがとうございます…」

そのとき、僕の中で時間が止まった。

僕の頬に何か温かいものが触れたのだ。

横を見ると…すぐ近くにアンリエットさんの顔があつた。

「えっ…？」

「ふふっ…先に戻っていますよ？小林さん。」

そう言っアソリエツトさんは先に戻っていった。

一体何があつたんだ…？

戻ってみると…そこには四人の少女の死体（？）が転がっていた。

みんなを元に戻すのに数十分かった…。

色々なことがあつた今年のハロウィンパーティーはこうして幕を閉

じ
た
…
。

第10話 ハロウィンパーティー 後編（後書き）

なんか小林が変なフラグ立てちゃいました。

コーデリア「ちょっと、何させてるんですか！！」

シャロ「先生に変なことさせないください！！」

…まあ、ミルキイのみんなからは非難殺到ですが、個人的には面白そうなので良しとします。

さて…パーティーも終わったし、次回からまた事件でも書いていこうかな。

トウエンティ「待たせたね、僕のファンの諸君！！次回はこの僕が活躍するから、期待して待っていてくれたま…」

お見苦しいところをお見せしました。申し訳ありません。

次回トウエンティが活躍する予定は今のところありません。

第11話 疑われた名探偵（前書き）

夏休み最後の日になって、やっと投稿となりました

夏休みは（主にバイトが）忙しくて大変でした

小林「あの…、何か題名に不安を覚えるんだけど…」

………

小林「え、何でそこで黙るの?!」

それでは本編へどうぞ〜

小林「ねえ、ちょっと!」

第11話 疑われた名探偵

「…どうしたんだ、神津。急に呼び出したりして。」

ある平日の午後…僕は神津に呼ばれて警察署へ来た。

もちろんミルキィホームズのみんなはいない。

平日の午後なので授業の真っ最中だ。

「急に呼び出したのは他でもない…小林、お前に見てもらいたいものがある。」

「僕に見てもらいたいもの？」

「ああ…咲、例のビデオを。」

「はい。」

咲君が僕に見せようとしているビデオを映し始めた。

僕に見せたいものって一体…？

「小林、最近この近くに出来た画展のことは知っているか？」

「画展…？いや、初耳だな。」

「その画展は世界各国から集められた様々な名画が集まっていて、世界中から注目されている。」

「へえ…。それはわかったけど、それが一体どうかしたたのか？」

「…先日、そこで窃盗未遂事件があった。」

「何だつて…！？」

「今見せているのは、その画展内の防犯カメラの映像だ。」

映し出されているのは、最近開かれた画展内の映像らしい。

「犯人は…やはり怪盗なのか？」

「……………」。

「神津？」

「…それは、見ればわかる。」

「……………」？

神津の様子が気になるけど…とりあえずカメラを見てみよう。

カメラを見始めて数分…画展のカメラの中には怪盗の姿どころか、物陰一つ見当たらない。

「神津、本当に怪盗が現れたのか？カメラには何も映ってないけど…。」

「もう少しだ、黙って見ている。」

「問題のシーンに突入。」

「一体何が映って…」

カメラの映像を見て、僕は言葉を失った。

それもそうだ。

何故なら真夜中の画展の防犯カメラの映像に……………僕の姿が映っ

ていたのだから。

「こ、これは一体…？」

「それはこちらのセリフだ、小林。何故カメラの映像にお前の姿が映っているんだ？」

「どうしてだ…？この画展すら今日知ったばかりなのに…。」

「……………」

「とにかく僕はこのことについては何も知らないんだ。信じてくれ、神津！！……………って言っても無理なんだろうな。」

「…まあな。お前が映っているこの映像が残っている限り、何の証拠もアリバイも無しに信じることは難しい。」

「…そうだな。」

さて…どうする。

ここで僕が捕まってしまうと、ミルキィホームズのみんなにも迷惑がかかってしまう…。

どうすれば…。

「…一日だ。」

「えっ？」

「今日一日だけ猶予をやる。お前が本当にこの事件に関わっていないのならば、今夜この画展へこい。俺が直接調べに行く。」

「で、でも大丈夫なのか？容疑をかけられているのに野放しにして…。」

「今までお前は様々な怪盗事件を解決してきた。その中には今回の名画よりも遥かに価値がある物を見てきたはずだ。しかし、お前はそれを奪おうとはしなかった。それに…。」

「それに…？」

「お前は名画など、そういったものに興味が無かったはずだ。」

「……………」

まあ…実際そうなんだけど…。

「一度学園に戻り、準備をしてこい。」

「ああ、そうさせてもらおうよ。」

こうして僕は今夜に備えるため、学園へ戻ることになった。

全く…面倒なことになったな。

神津に言われた通り、探偵学園に戻り今夜の支度や対策を練っていたのだが…

「さて…どうしたものかな…。」

戻って準備をしるだなんて言われても…相手が相手なのでどうすればいいのかさっぱりわからない。

どうする…？

「少し気分転換に散歩でもしてこようかな。考え込んでいたって何も変わりはないんだから…。」

「ふう…。」

探偵学園の近くにはたくさんの木々が生い茂り、気分の安らぐ場所がある。

僕は事件で疲れたときなどに良くここにきている。

「やっぱり、ここになると気分が落ち着…」

「やったー！！釣れたー！！」

「わーい！！早速食べましょうー！！」

「ちゃんと焼いてからでないと、お腹壊すわよ。」

「あ…キノコが焼けました…。」

落ち着かなかった。

「ちょっとみんな…こんな所で何をやってるんだい？」

「あ、小林！！ちょうどいい所に。たった今でつかい魚が釣れたんだ。一緒に食べない？」

「さ、魚？何でこんな所で…。」

「だってあたし達が学校で食べられるものわ蒸かしたお芋一つだけ

なんですよ！！あれだけじゃお腹が空いちゃいます！！」

「そ、そうなんだ…。」

前に食事の話は聞いたことがあったけど…まさかこんな所で自給自足の生活をしていたとは…。

「まあ、火の取り扱いとか、お腹を壊したりとかしないようには注意するようにしてね。」

「せっかくでしたら教官も一緒にどうですか？」

「色々焼けていて…美味しいですよ…。」

「えっと…。」

正直言ってしまうと、今は彼女達と一緒に食事をしたい気分じゃない。

僕の姿に成り済ました犯人のことについて、色々考えなくてはならない…んだけど…。

「あー！！エサだけ盗られた！！ちくしょー！！」

「頑張ってください、ネロ！！もっともっと大きな魚を釣ってくださいー！！」

……平和だな、この子達は。

もし僕が捕まったりしたら、この平和な日常も無くなってしまうんじゃないか？

……これは、気を引き締めていけないといけないな。

「…どうかしましたか、小林さん？」

「いや…何でもないよ。そうだね、少し貰っていいのかな。」

その後ネロと一緒に釣りをして大きな魚を釣り上げたり、みんなでキノコを採りに行ってシャーロックが変なキノコを食べて大変だった、近くの川で遊んだり、楽しい時間を過ごせた。

…こんな何気ない日常を絶対に壊さない、と僕は心に誓った。

「よし…行くか。」

その日の夜…準備を整え部屋を出た。

今日の外出のことは既にアンリエットさんには話は通してある、少し気まずかったけど…。

既にアンリエットさんの所にもこの事件のことについて話がきていたらしい。

カメラに僕が映っていて、僕が疑われていること、そして今からこの事件について調査しに行くこと…アンリエットさんは快く受け入れてくれた。

「そういえば…こんな夜遅くに外出するなんて、始めてじゃないかな？」

ガサガサ……

「風か…？」

まあ最近天気も悪いし、風が吹いていたのも不思議じゃないか…。

そして僕は事件のあった画展へ向かった。

「ちょっとシャロー!!もう少しで教官に見つかっちゃったところだったじゃない!!」

「あう…、すみません…。」

「コーデリアさん…落ち着いて…。」

「早くしないと小林行っちゃうよ?」

「そうだったわね…。それじゃあ教官に気付かれないように、静かに付いて行きましょう。」

「これってストーカーって言うんじゃない?。」

「ち、違うわよ!!これは…そう、尾行であって決してストーカーってわけじゃ…。」

「はいはい、ストーカーでも尾行でも何でもいいからさっさと行くよ。」

「それじゃ…ミルキイホームズ、出動!!」

「」「」「おー!!」「」「」

「ここか…」

学園を出て数分、僕は事件のあった画展へ着いた。

「やっと来たか、小林。」

「神津…。」

「今回画展内を警備するのは俺とお前のみ。G4には建物の周辺を任せる。」

「ちょっと待ってくれ。今日僕達が来たのは調査だったはずだ。だけど、どうして警備に変わってるんだ？」

「…お前が戻ったあと、予告状が届いた。」

「何だって！？それは本当なのか？」

「ああ。…送り主の名前に“小林オペラ”と書いてあった。」

「……………」

「もしお前が犯人じゃなかったとする場合、犯人は必ず外から現れる。この画展の入り口は全て警察とG4が封鎖している。そう簡単には突破されない…」

「…突破されたような声が聞こえたんだが…」

「……………」

「みんな、どうしてここに!?!」

小衣ちゃんを突破してきたのは彼女達だったらしい。

けれど…どうしてこんな所に？

「それはこっちのセリフですよ!?!どうして教官がこんな所に来るんですか!?!」

「そ、それは…」

「それに予告状に小林の名前って…どういうこと？」

聞かれちゃったか…。

これはもう正直に言うしかないかな。

「この前、この画展で盗難事件があったんだ。…そのときのこの防犯カメラの映像に僕の姿が映っていたんだ。」

「え…？それってどういう…」

「簡単にいえば、僕がこの事件の犯人として疑われている、ってことかな。」

「そんな…!!」

「だから、君達はもう帰るんだ。こんな夜遅くの外出は校則で禁止されているはずだよ？」

「教官は、どうするつもりなんですか？」

「これからここで犯人を捕まえる。いつまでも疑われたままは嫌だからね。」

「それなら、あたし達も一緒に…」

「それは駄目だ。」

「ど、どうしてですか!？」

「容疑者の僕と一緒に行動していると、君達まで容疑をかけられてしまう。」

「……………」

僕がそういった瞬間、みんなは黙り込んでしまった。

みんなには、絶対に容疑をかけたくなかった…。

「だから…」

「…です。」

「え？」

「そんなの嫌です!! また先生だけ何処かへ行っちゃうなんて!!」

「だけど、君達には容疑をかけられたくないんだ…。」

「容疑にかけられたっていいです！！あたしは先生と一緒にいたいんです！！」

「……………」

「あゝあ、シャロ泣いちゃったよ。でも…」

「でも？」

「ボク達だって同じ気持ちなんだよ。小林と離れたくない…そうでしょう？」

「はい…！！」

「もちろん！！教官一人だけだなんて許しませんよ！！」

「……………神津、いいか？」

「…勝手にしろ。」

「それじゃあ…」

「ああ、一緒に行こう。僕も何とか君達を守るようにするけど、もしかしたら守りきれないかもしれない…」

「大丈夫です！！先生と一緒にいられるなら！！頑張りましょうね！！」

「……いい生徒に恵まれたな。」

「……ああ。」

「ミルキィホームズ＋小林オペラ、出勤！！」

「……おー！！！！」

「お、おー…」

彼女達の雰囲気は若干押されつつも、僕達の調査が始まった…。

第11話 疑われた名探偵（後書き）

ってことで、小林が容疑者になっちゃいました

小林「まさかこんなことになるなんて…」

容疑を晴らすために頑張りなさい

今回も二回で一つの話になっています

ただ、僕の都合で一話延びちゃったりするかもしれないのでご了承を

では、また次回！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9734q/>

探偵オペラ ミルキィホームズ ~帰ってきた名探偵~

2011年10月8日19時29分発行